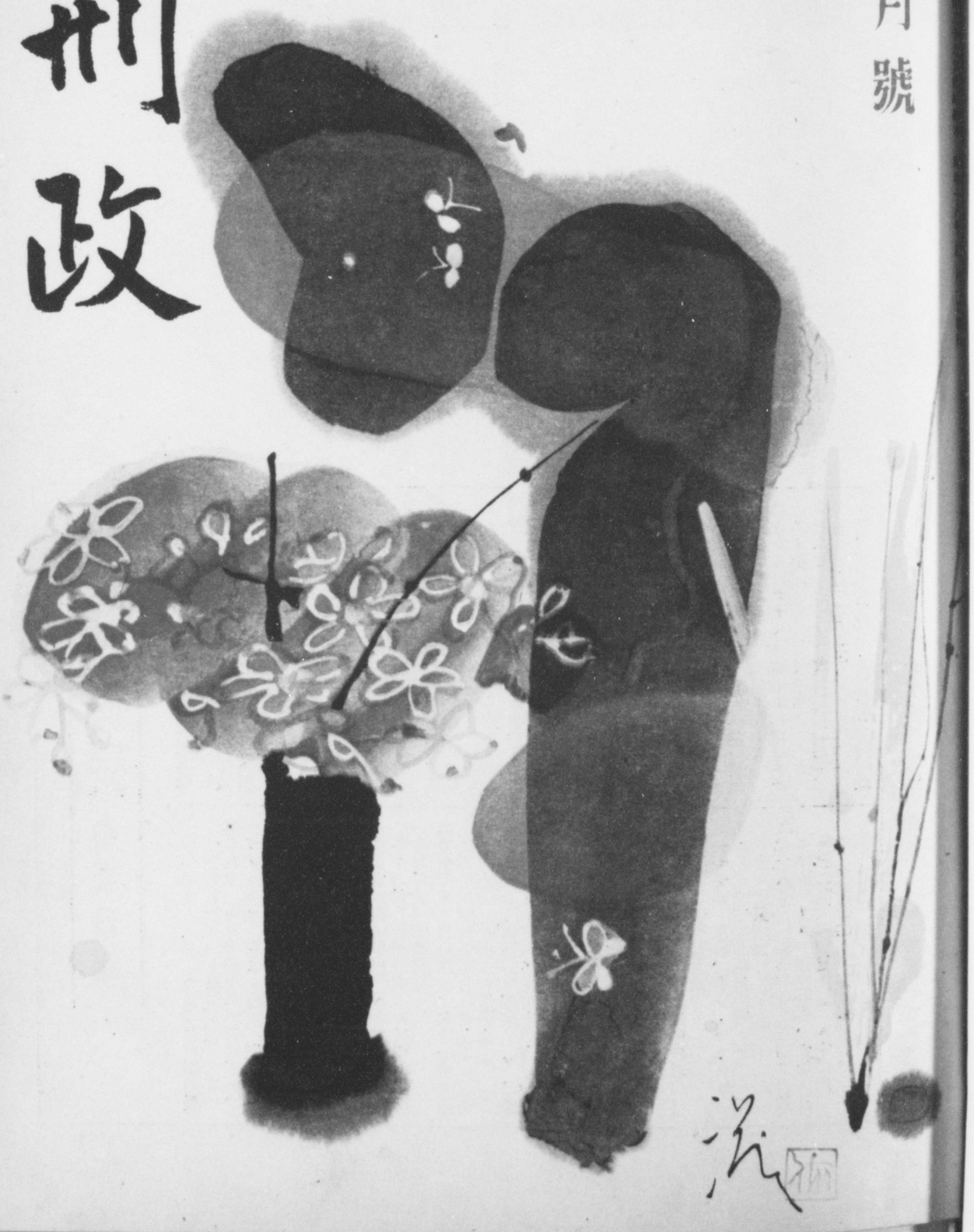
矯正図書館

月刊刑政

四月號



刑政第56巻第4号
矯正図書館

刑政日誌

（自二月十八日至三月十五日）

二月二十七日　作業技術者實務練習所開所（於刑務協會講堂）

三月六日　作業技術者實務練習所終了

三月十日　東京管區作業統制委員會（府中刑務所主催、於刑務協會講堂）

自昭和十八年一月二十六日至二月十八日　重要日誌

一月二十六日　轉廢業小賣業者共助金要綱決定　△重要産業勞務者に初給手當支給　△西部ジャワ軍政決院長初會議　△インド獨立記念日　△英米兩首腦のカサブランカ會談發表　△米大使スターリン首相と會見

一月二十七日　海軍聯合航空總隊編成（聯合航空隊令一部改正）公布（二月一日實施）　△電力、電燈の消費規正强化の改正告示公布　△製鐵工場國家管理指令　△濠洲議會開かる　△チリー政府邦人を抑留

一月二十八日　第八十一議會再開、東條首相施政方針大演說、本年中ビルマの獨立を約す　△スターマー獨大使入京　△日本醫師會、齒科醫師會設立　△カサブランカ會談終了

一月二十九日　**レンネル島沖海戰**　△工場鑛山の日佛公定賃銀決定

一月三十日　科學技術審議會第一回總會　△ナチス執政十周年にヒ總統演說（ゲツベルス代讀）

二月四日　林銑十郎大將薨去

二月五日　大東亞要員錬成要綱閣議決定　△日食觀測に成功　△伊内閣大改造、首相外相を兼任

二月六日　大元帥陛下海軍式御軍裝御改正あらせらる

二月七日　ナチス黨指導者大會　△チアノ伯法王廳大使に任命

二月八日　臨時軍事費豫算追加案（二百七十億）閣議決定議會提出　△帝國、在華敵産一千餘件移管を國民政府へ通達　△華北政務委員會委員長に朱深氏就任（王揖唐勇退）

二月九日　南太平洋方面の我軍ブナ、ガダルカナル島より轉進に關し大本營發表

二月十日　山下、岡部、藤江三中將陸軍大將に進級　△ガンヂー斷食開始

二月十一日　日本、ブルガリア間に友好及び文化條約調印　△第一回勤勞顯功章授與式擧行　△支那派遣軍昨年中の綜合戰果公表　△英米聯軍事會談重慶に開催發表

二月十二日　天皇陛下、木造船御奬勵に帆柱用材御下賜あらせらる　△帝國潛水艦の戰果大本營發表

二月十三日　帝國海軍部隊のソロモン、ニューギニア方面未發表戰果公表　△昭和十八年度豫算案議院可決

二月十四日　獨軍、ロストフを撤收

二月十五日　シンガポール陷落一周年記念　△沙市、南昌方面より新作戰展開の旨發表　△旅客列車減少實施

二月十六日　蘇淮地域に新作戰展開の旨發表　△十八年度國民貯蓄增加目標二百七十億圓と決定

二月十七日　海鷲、サン・クリストバル島東方にて敵輸送船團猛攻　△平賀東大總長逝去

二月十八日　出版事業令公布即日實施　△獨軍ハリコフ撤收公表、宣傳相危機强調國民の蹶起要請　△宋美齡、米に重慶援助を哀訴　△我軍阜寧占領

月刊刑政

主張

春である。とはいへ、春を謳ふには餘りにもこの時局は嚴肅であろ。

アメリカの戰爭目的は分明を缺く。此の事がアメリカ人全體の進退を決定的ならしむるに大きな害をなしてゐるとも聞くのである。しかしながら、われわれにとつてはアメリカの戰爭目的は明白なのである。日本の對米無條件降伏あるのみとか、日本を地球上より抹殺し去るとか、さては、戰後には日本の教育を拔本塞源的に改變するとか、ルーズヴエルトの揚言として之を聽くのである。

われわれは是が非でも勝ち拔かねばならぬ。今年を頑張り得てこその長期戰である。今年を頑張らねばならぬ。

大國の戰度とおほらかの心とを持ちつづけたい、と共に鬼畜との戰ひを擊ちてし止まねばならぬ。たしかに、民に一片の倦怠なからしむることは爲政者の今に最も大きな責任であらう。

行刑は今まつしぐらに時局の要請へ趨つてゐる。行刑人は、生産增强の一翼を擔當して、第一線將兵に負けじと　大君にすべてを捧げまつるの忠誠心に燃えてゐる。それを信ずる。

このとき、名利や立身出世の念慮が、上下を通じ、いささかでも、この忠誠行の中にかくれ混じることなきを、切に希ふものである。いつの世にも、下に倦怠の心を生ぜしめて、事を毒するものは爲政者群（ここでは行刑人）の「立身出世主義」であらう。受刑者も、大勢として、眞劍に働いてゐる。

戰爭の眞意義を固く「八紘爲宇」の肇國の御精神に把握しつつ、深刻慘烈なる戰ひの形相をはつきりと認識し、我人共に、ひとりの落伍なく、ひたむきに行刑報國の道をすすみにすすみたい。

目次

表紙（春景）……初山　滋
主張……（一）
拘禁性精神反應と詐病……大倉　功（二）
考査雜筆二題（二）……玉生道經（四）
積亂雲……尾崎士郎（八）
日本の山の美しさ……向井潤吉畫
隨筆・教育者（中）……深田久彌（三）
母を喪ふ……添田知道（四）
反樞軸陣營の同寮異夢……諏訪令海（九）
ゼーバツハ氏……林　秀（三）
「監獄費國庫支辨」問題の頃（三）……大石　武（三五）
莊子物語……島　正雄（二九）
南のたより……聽八郎（三四）
東京通信……（二四）
讀者の聲……（二四）
刑務所だより……（三三）
新刊紹介……（一八）
俳壇・歌壇……（三六）
書道……（三八）
時事トピック……（三九）
刑務官異動……（四〇）

刑政第56巻第4号
矯正図書館

拘禁性精神反應と詐病

大倉功

緒論

刑務所に拘禁せらるることに因り生ずる環境の變化、精神的衝動、身體的影響等によりて被拘禁者に精神障碍を發すること多きは自明の理にして、一八五四年デルブリュックの報告以來諸家の之に關する知見症例の發表多し。

昭和十四年度の司法省統計を見るに精神病患者數は三三二名、ヒステリー及神經衰弱患者數は計一一三九名なり。而して昭和十四年度頭初の收容者數は五〇・四四二名、十四年中の新入所者は三四・一七四名即ち十四年度中に刑務所にて觀察せられし數は八四・六一六名なり。之に依り百分比を見るに精神病患者は〇・四%弱、ヒステリー及神經衰弱患者は一・三%強なり。社會の精神病患者數は約〇・一%なれば刑務所にては普通社會の四倍の多數を見るものなり。ヒステリー及神經衰弱に就きては普通社會の統計は無きも、之又著しく多數なるものと思料せらる。

之が原因は精神病者及精神病の素質ある者は犯罪に陷り易きが爲なるも、又其の拘禁生活の精神上に及ぼす影響の大なるがため、卽ち拘禁性精神反應が大なる原因をなすものと認めざるを得ざるなり。

詐病は刑務所に於ては甚だ多く、恐らく他の如何なる社會部面に比しても其の頻度は遙かに多かるべし。刑務所にて診療に從事する醫師は詐病を常に念頭に置かざるを得ざる狀態なり。

予は最近拘禁性精神病なりや、或は詐病なりやと其の診定に甚だ困難し觀察せる中、其の症狀略去りて後既往症其の他より拘禁性精神反應としての癲癇性精神發作なりし一例を經驗せり。依つてその診察過程を記載せんとす。

症例

谷〇金〇　四八歲　男子　農業

第一回診察(十月八日)

昨夕收容せる竊盜被告にて、收容時の取調べに於ては異常なかりしが今朝來全く茫然として一言をも發せずとの報告あり直ちに診察す。

強く俯向き步行緩かに、看守に促されつゝ來たり命ぜられて椅子に着けり、衣服少しく亂れ周圍に全く無關心なり、輕度の强硬症及び全身特に上肢に震顫あり、外面茫乎たり、姓名年齡を尋ぬるも答へず「谷〇金〇か」と再三問ふに漸く點頭く、其の他何を尋ぬるも一切答へず、時に少しく點頭き、又「怖い〳〵」「惡い事は爲ない」等低聲に獨語す。「顏を擧げよ」「步け」「停れ」の命令には從ふも緩徐たり。

體格中等、榮養稍良、身體各部を檢するも創痕、畸形を認めず、各腱反射は明らかに亢進す、瞳孔稍散大するも形狀變化なく對光反應あり。

診斷確定し難く一週間後再診致すこととし其の間居房に於ける動靜の觀察を看守に依賴せり。

第二回診察(十月十五日)

居房に於ける狀態は常に深く首を垂れて靜坐し、全身に震顫あり、時に低聲に獨語することあるも言語不明なり、用便は自ら足し失禁せることなし、夜間時に眼醒め居るも睡眠は比較的良なるものの如しと言ふ。

態度外面は前回と同樣なり。問診をなすも殆ど答へず。「頭が痛いか」答へ無く點頭くのみ。「夜何か出て來ないか」「お母さんが來る」。「何んな風をして來るか」「白い着物を着てる」。「何か話すか」「早く家に歸れと云ふ」。漸く以上の如き問診を爲し得たるも此の間强く俯向き居り繰り返し尋ねて漸く低聲に呟くが如くに答ふ。

刺針に對して少しく身體を動かすのみにて强ひて避けんとせず。

第三回診察(十月廿一日)　本日公判開廷

其の後症狀に何等變化なきまゝ公判となれり。裁判長の問ひに對して全く答へず、身體特に上肢の震顫著明なるのみ、止むを得ず裁判長休廷を宣す。退廷後附添へる看守より「返事をしないと何時迄も公判延期のまゝ過ぎて損だ、どうだ返事が出來るだらう。名前を言ふて見よ」と懇ろに諭せるに緩徐乍ら返事を始めたり。斯くて再開公判廷に於ては最初は答辯緩徐にして身體の震顫又ありしが、漸次通常に復し犯罪事實に就きても記憶正しき答辯をなすに至れりと云ふ、依つて診察す。

物に怯びえたる如くなるも態度通常禮あり。「私を見たことがあるか」「ありません」。「今日は何日か」「分りません」。返答及其の速度普通、發聲困難を認めず。記憶不良にして紀元節を知らず。又現在日本が戰時下なることは承知せるも何國と戰ひ居るかは知らず。計算能力又不良にして8×8＝138、1,000－112＝81等と答ふ。感情沈鬱、判斷思索何れも不良なり。

拘禁以來の記憶せる部分を述べしむるに次の如し。

「家の事が氣に懸つていたが刑務所に連れて來られた晩亡くなつた母が白い着物で出て來て、『妻が警察へ連れて行かれ、赤ン坊は泣いて困るし田をする者もないから早く歸れ』と云はれそれから頭が茫として來て何も分らなくなつた。診察を受けたことも覺えてゐない、昨晩から少し分る樣になつたが尙言葉が出にくかつたので默つて居たが、看守さんに色々と言はれ、默つて居ては惡いと思つて話し始めた處段々頭がはつきりして來た。頭が未だ少し重いが氣分は普通です」

遺傳歷　父は頭痛癖ありて常に鉢卷をなせり、酒を好まず。母は普通なり。同胞は姉一人弟一人にて姉は普通なるが、弟は數年前精神病に罹れり、現在は治癒し請負業を爲すもその子供に一人癲癇症者あり。患者の子女九名にして中二名は腦膜炎にて三歲と五歲にて死亡せり、長男は二三歲なるが屢々卒倒するが屢々卒倒す、其の他の者は學業劣等なるも變化なし。

既往症　患者十歲時茫然と家を出で、五日目に意識したる時は十里先の天神樣の境內に居りたりと、空腹甚だしく足に履物なく豆だらけとなり居たり。其の後は斯かる事なきも、田に行く積りで家を出で山に至りて茫然たりしことあり。又買物の目的にて町に出で乍ら、買物をなさずに歸宅するが如き事數回ありたり。倘一年に二—三回は發作的に頭重頭痛を覺えて卒倒し十分間位意識不明のまゝなることあり、時に半日も氣付かざることありたりと。然し自身にては癇癪なきが故に癲癇にはあらずと云ふ。

考按

患者の症狀を要約すれば迷蒙狀態にあり、卽ち恐怖症、緘默症、無罪妄想ありて氣力沈衰し抵抗の元氣なし、之等は拘禁性精神病の一型を示す、斯くて第一回診察に於いては拘禁性精神病と詐病を疑へり。

而して詐病にて特有なるは症狀の誇張性なるが、本患者は全く消極的にて無關心の狀にあり、斯くて第二回診察に於いて拘禁性精神病と判定せり。

然るに公判に際し利害得失を說示せらるゝや緘默症先づ消え、次いで忽ち諸症狀恢復し普通狀態になれりとの報告に接し、詐病なりしかと嘆ぜし次第なりしが、其の遺傳歷、既往症を知るに及び拘禁性精神病にも非ず又詐病にても非ず、實に拘禁性精神反應としての十三日間に亙る癲癇性精神發作なりしこと分明せるなり。

文献

1 Delbrück, Allg. Zeitschr. f. Psych. 11, 57, 1854.
2 Gluck, Studies in forensic psychiatry. 1916.
3 杉江董　犯罪と精神病
4 小南又一郎　實用法醫學
5 三宅鐵一　精神學提要
6 瀧野憲照　京都醫學雜誌第24卷　7. 8. 9 號
7 丸山郁雄　行刑衞生會雜誌第13卷　4. 5. 6 號
8 大日本司法省第41行刑統計年報　昭和十四年

（完）

刑政第56巻第4号
矯正図書館



考査雜筆二題（下）

玉生道經

希望と諦

かれは授業が終つて、早々と校門をでた。そして、すこし遠みちにはなるが、電車や自動車の通らない靜かな植込みのある家の多い裏道を選んで歩いた。

おだやかな天候の日に歩きながら、いろ〳〵と心をまとめることは、あさ綠茶をすゝりながら新聞に目をとほすときとともに、かれの樂みの一つだつた。

かれはある日の考査室風景を想ひ浮べつゝあるいてゐた。

かれは著しく無氣力な青年と對談してゐた。その青年は今まで魯鈍普通境界、自我柔軟性といふレッテルを貼られ、生れつき自發性の滅弱した更生不能者として取扱はれてゐた。

決してこの診斷は誤れるものではなかつた。實にその通り、經歷全體にわたつて典型的な無氣力を示してゐた。

考査室に呼びだされたその青年は敏感な警戒心をはたらかして、ひそかに纖細な女性的な神經をたてゝゐた。

かれはまづ、警戒心といふ大きな邪魔ものをとり拂ふために言葉をかけてみた。

「生國は富山だつたね。北陸一帶は、今年は七十年來の大雪だそうだ。今年も豐年だといゝね。」

「意外な！」といふ顏をして、青年は呟くやうに、「はい」と答へたのみだつた。

その戸棚のなかに茶器があるから、出して茶をいれてくれ。

うまくいれてくれ。茶はこゝにあるよ。」

かれは茶壺をてわたした。

青年には茶壺を開けたり、茶を加減したり、湯かげんをみたりすることが、實に嬉しかつたらしい。

「うまくでてゐるかな」とひとりごとを云ひつゝ、茶碗をさしだした顏には素直な心が窺はれた。

「あゝうまい。もう一ぱい。

それから、ストーブに石炭をすこし入れておいてくれ。」

青年はそわ〳〵と動きだした。どこにも怠け者らしいたいぎさが無かつた。身輕く働く呼吸を知つてゐる男なのだ。

「節約時代だからさうやたらに石炭をつめ込むな。人のものだと思つて。」と笑ひながら窘めた。

青年のかれをみる眼が、兄をみる眼のやうになこやいていつた。

この男の神經は實に敏感だ。けつして根からの魯鈍ではないと思つた。

かれはこの訊問や檢査はうまくゆくぞと思つた。ほや一人の男を救ひ得たやうな自信に滿ちた氣持になつていつた。

「さあ、もういゝかい。座れ。これから恥しいことも聞くが、いつときだ。先生になんでも承知してゐて貰つて、一皆あづけてしまつた氣持になつて、先生と一緒に修業を初めるのだぞ。

なんでもお前を重苦しい氣持にするやうなことは、今のうちに吐き捨てゝしまへ。いゝか。さうでないと見當違ひのことをやられるからな。」

また青年の眼に意氣地のない不安な表情がかすめた。しかし、もう大丈夫だとかれは思つた。

調査も果して順調に進んでいつた。實に調べよかつた。

この好調子は心機一轉のはずみを與へる心術とか、誘導のテクニックとかにも關係がないとは云へないが、かれの胸の腫物が二ヶ月の懊惱悔悟の生活を經て、ちやうど切開にてごろな化膿期に達してゐたゝめに、たやすく膿をとりさることができたことに起因するのであらう。

青年は幾年ぶりかで、さつぱりとした氣持になることができた。

教育手段としてこの個性調査自身が、すでにそのまゝ治療的、矯正的効果を發揮し得たほどに好調子だつた。

知能檢査の結果は知能指數一〇八で、普通程度を越して、良ちかくまで漕ぎつけた。しかも、そのうち時に想像工夫の能力に優秀さを示したことは嬉しかつた。

果して、みかけだけの低腦兒で、いはゆる知的疎略兒であつたのだ。

子供の教育にまつたく無關心な貧困家庭と、小學校教師の怠惰と無理解と、それから當人の生來の著しい內氣と無口から、外面的には低腦兒となり了せたものであつた。

その鋭敏さは人の窺ひ得ざる虛無的な浮浪者的世界に、不健康な詩を求めてゐたのであつた。久しい逃避生活のために、この青年には一般社會への興味の喪失と、それにともなふ常識の不充分とがあり、人なみの仕事はやらうともせず、また出來なくなつてしまつてゐる。

しかしながら、この點の矯正は決して手遲れではない。一〇〇パーセントの効果を擧げうるであらう。

情意の檢査では向性指數七五を示し、著しい內向性が認められる。

日本人の平均の向性指數が、一二五ぐらゐであるから、一般社會人としては顯著な偏畸性を有することを斷定しうる。

受刑者一般の平均は大約一一五ぐらゐであるから、この青年は收容者仲間に於いても、この點に目立つた特色をもつものと認めてよい。

受刑者が一般社會人に比して、內向的傾向が顯著であることは數として陰にこもつた人柄が多く、實直開放的なものより自信を失つた小心で、陰氣で、逃避性のあるものが多數を示してゐることを物語りはしないだらうか。

死んだ母親に似て腺病體質で、ひと一倍過敏な神經をもつた兒が、汚濁に淀んだやうな不健康な裏長屋に生れ、乳呑兒時代から人々からは町の寄生虫ぐらゐにしか取扱はれず、唯一のたよりであるはずの父親とて、ふたことめには「うるさい、馬鹿、ひつこんでゐろ」と邪魔者扱かひにした。

かれには小學校の無邪氣な時代にさへ、憶ひ出となる友人も無かつた。先生にも亦かれを避けてゐるやうな素振があつた。

一、二年の頃か、級友達がわい〳〵とある女の先生にからみついて戲れてゐるのを見て、彼はたまらなくなり、一番あとから遠慮勝ちに抱きついていつた。

その時、女教員は「おゝ、汚ない、」と云つて彼を振りきつた。その女教員としても無理もなかつたであらう。

これがかれの幼兒時代の臆氣になつたいろ〳〵な記憶のうちに、冷然ときはだつて浮彫となつて現れてゐる學校といふものであつた。

自己のまほりに誇の片鱗だにみたこともなく、もの心もつかぬうちに、すでに希望といふに値しないやうなつゝましいものに對しても著しく臆病となつた。

このやうな自己喪失といふ偏畸傾向の矯正は、狙ひどころのはつきりしない跋舞鞭撻や同情のみをもつてほ、たうてい成功しうるものではない。

このやうな場合には、むしろ大手に出て、その青年の自ら意識せずして有つ力を檢出し、その短所と長所とを明確に指摘して、その才能の運用の呼吸と、社會的要請を教示する方法以外に、その青年をして自己を取戻し、奮起せしめることはできぬと考へた。

つぎいて、かれはこの青年に諸種の性能檢査をほどこし、精神機能、運動機能、知覺機能の三つの方向、十七種目にわたつてその成績を精密に記錄した。

すでに施行した一般知能檢査の結果を裏切らず、精神機能檢査に於いても普通以上の成績を擧げた。ことに、構成力において優れた才能をみせた。

運動機能檢査の成績はだいたい普通であるが、惜しいことに、力量は背筋力、握力ともに普通よりやゝ低い成績にとどまつた。

知覺機能は輕度の弱視を認めるほかには普通であつた。

かれの性能プロフィールは大體において頭腦人のかたちを示した。彼の無氣力の原因である自信喪失も、意外にも、けつきよく頭腦人的ヒポコンデリーに起因するのかもわからないと思つた。

かれは青年に喜びをもつて告げた。

「お前は頭腦人のかたちの男だ、お前の頭は磨けば光るぞ。はつきり目標をきめて努力すれば、必ず普通人以上のものになれる。

今日から心をいれ更へて勉強してみろ。便利は出來る丈け計つてやる。」

青年はしばらく唖然とした夢みるやうな顏をしてゐたが、隱しきれぬ喜びに、下を向いて頰をそめてゐた。

このやうに純な喜びかたの出來る男か、何故に今のやうな境遇にまで陷ちたか、不可思議な感がしてならなかつた。そして自問自答した。

「この男も生活場面が變ると、豹變する病的なところがあるのかな。この男も再犯率三〇幾パーセントかをこしらへる一人なのかな。」

「それと今の問題とは別だ。そんなことは負因調査をしてみれば、すぐ目安はつく。」

「まづ信じることだ。」

かれはみづからの創案になる負因檢査を施行してみた。

負因指數は二七で、陽性であるが、受刑者としては中等度で、みかけよりは輕い方であつた。

かれの心身條件に關係するマイナスの因子の指數は一〇で、意外に少かつた。それの主な不良條件は腺病質、睡眠障碍、神經過敏などであつた。

社會關係の負因指數は二五で、受刑者としては平均的地位を占めてゐる。その主な負の因子は、母との死別、父の無敎養、冷酷な主人、頻繁な轉職、放浪生活經驗、自殺未遂、孤獨、回避癖などであつた。

要するに、この調査の示すところによれば、かれの犯因性條件は外的な社會關係の場にあるもので、おそらくかれの無氣力といはれる點は、環境の强壓によりもたらされた外傷的なものであらうと思はれた。

だから適當な生活指導によつて、日の仕事に興味をもたせ、勤勞と協同の喜を知らせることができると思つた。その勤勞の喜びこそ喪失せる自己を復活せしめ、また希望の泉ともなり、國家的重任を自覺せしめるいとぐちともなるであらう。誇はこの自覺とともにある筈であると思つた。

この青年の場合のやうに、負因ことに私的負因の少ないことは生活場面の急轉によつて、運命的な豹變の可能性の少ないことを意味する。

かれは祕かに「信じてもよい男だつたのだ。可愛相に、」と思つた。

新式の分類技術で、かれの人格型と處遇類別の整理をしてみると、第六型、七五といふ標式がでる。この標式は敎育的熱情と適當な科學的處理により、更生の實を擧げうることを暗示するものであつた。

かれは青年にたいするありあまる情熱をもちながら、目前に解決を求めて迫る人間のまことの元型的な姿を理解することも出來ず、したがつて指導方針をも立て得なかつたことがあるとすれば、もつぱら科學的敎養の貧弱と僞端の缺除と見做す以外に仕方がないと考へた。

かれはその青年の性能のプロフィールを眺めながら促すやうに云つた。

「ときに、お前はこゝで、どういう仕事がやりたいと思ふか。主な種目は木工、洋裁、印刷などだが。云へば細目まで希望してみろ。」

「はい。出來れば、印刷をやりたいと思ひますが。」

「實は、自分の叔父が印刷屋をやつてゐるので、少し手助つたことがあります。それに自分もあのやうな仕事が好きなんですが。」

青年はすでに腹のきまつた立派な返事をした。性能プロフィールは視力と作業速度にいくぶんの缺點があるだけで、總體に印刷は不適職ではなかつた。また性格的に印刷を選んだことにも無理はなかつた。

かれの云ふ印刷屋の叔父といふのは、將來の保護にも關係あることが考査原簿に書かれてゐた。

「よし。では印刷の係の先生に御願してみよう。

お前は今まで、職を變へては渉り歩いて、なに一つ特技がない。すこし恥しいと思ふだらう。印刷工場へいつたら、これを天職と心得て勉强しなさい。

實は、お前には印刷工としての天分があるのだ。だから努力次第で立派な植字工にもなれる。」

「それから、自分ひとりで仕事をして成績を擧げてゐれば、文句はあるまいなぞと考へてゐてはいけないぞ。人と協力するといふことを忘れてはいけない。ことにお前のやる仕事は分業だから、責任といふことを常に考へてくれなくては困るよ。いゝね。」

かれはテーブルの抽出を開いて、考査結果通知表と印刷されてゐる用紙をだした。そして、收容者に最も影響を與へる立場にある人だちに、敎育のてがかりや矯正のメスの入れどころを敎へるために、必要なことを書きこみながら青年に話しかけた。

「自分のよい性質と思ふところと、悪い改めたいと思ふ點が云へるか。參考にするのだから、ざつくばらんに云つてごらん。」

青年はこの奇妙な質問にこうじはてて、答へにくさうに、しばらくもじもじしてゐたが口を開いた。

「ことによい性質はありません。悪い性質はつい嘘をついてしまふことと、怠け癖があつて、仕事がつゞかないことです。」

「よい性質が無い？　遠慮しなくてもいゝよ。立派にある。

今までの生活にかゝはらず、素直な一面のあることだ。これからは誰にたいしても、さうでなければいけないね。」

彼は書きものを止めて、青年の面をみつめながら言葉をつゞけた。

「悪い點だが、お前の云つたことも當つてゐる。お前は今、癖と云つたが、しかし病的なものではないから必ずなほるよ。

一番さきにお前のなほさなくてはならぬところは、神經質で、臆病で、自信のないことだ。

二、三日經つたら、また會ふから、この點に就いてよく反省して、矯すためにはどうすればよいか考へておけ。これが宿題だ。」

だいぶ感動したらしいから、今日はこの青年に自分の力量をみかへすきつかけを與へただけでよいだらう。今日の試の効果如何で、二三日たつたら個人的な自信と希望から進出して、さらに高次な非常時國家の要望にこたへる國民としての誇を吹きこむのが、適當な手段であるとかれは考へた。

受刑者引取の戒護看守がはいつてきた。

かれは記入濟みの考査結果通知表と、幾枚かの經過觀察用紙とを看守に手渡しながら青年に向つて云つた。

「今日は終つた。居房に歸つたら、つくづく考へみろ。ではまた呼ぶから。」

部屋をでてゆく青年の後姿には、もはや入室當初の不氣味な不明瞭な影は見られなかつた。

かれは豫後良と原簿に書きこんでしまひたい衝動をさへ感じた。

…公平にして適確な科學的豫見とその合理的處遇とが、周圍の高慢な無知により害なはれんとした若い命を救ふ。そして、青年が順調なる經過をたどり、一級者となり、賞表を受け、不定期釋放の恩惠に浴し、將來たくましい兵士として、あるひは產業戰士として、國の子である面目を充分にほどこす。こゝにこそ、純粹美が見出される、…とかれは夢みるやうに考へつゞけた。

路次奥からころがるやうに走り出して來た白い小犬が、かれの足元に尾を振りつゝまつはりついた。犬は自分の主人の歸りとでも間違へたのか。彼は中腰になつて犬の頭をなでた。犬は齒をたてずに輕くかれの手を噛んだまゝ、また小路次に駈けこんでしまつた。

かれは立ちあがりながら、ひとりごとを洩した。

「いかなる困難も、詩人をして倦ましめることはできない。また科學者は、詩人の情熱を空しく燻らせるやうなことはさせまい。—おのづと道は通ずる。」

大空には、午後の太陽が、たゞ一つとり殘された浮雲をあかねいろに美くしく染めなしてゐた。

刑政第56巻第4号
矯正図書館

積亂雲

比島戰線の回想

向井潤吉畫

尾崎士郎

行軍閑夜

長い行軍の途中で過した夜營のおもひでほど愉しいものはない。私たちはリンガエン灣に上陸すると、まもなくバウアンの町で二日間を過し、それからすぐに長い行軍に移つてやつとビナロナンの町に着いた。街道をはさんだほそ長い町で、住民のゐない民家には兵隊が充滿してゐる。私たちの宿營は町の四つ角を曲つて二軒目の二階家であつた。うしろが椰子の林で、小高い丘のかげには敵兵の屍骸が強烈な陽ざしに照りつけられて一種異樣な臭氣を放つてゐる。戰車やトラックが通るごとに砂塵が濛々と舞ひあがり、風が吹くと屍臭が家の中まで漂つてくるが、誰れひとりそんなことを氣にしてはゐなかつた。バウアンに着いてから忙しい日を送つてゐるので、今は何日であるのか見當もつかない始末だつたが、一日一日と記憶を辿つてゆくうちに十二月三十日だといふことがわかつた。私たちのゐる二階家は戰前には街の音樂家が住んでゐたらしく、大鼓や笛が置いてある。部屋の片隅にはピアノがあつたので、ピアノの彈ける今日出海君が、「螢の光」を彈いてみんな合唱した。そこへ大塚准尉が何處からかビールを運んでくる。酒宴は夜になるといよいよ酣になつた。大鼓を敲くものがある。ピアノを鳴らすものがある、笛を吹くものがあるといふわけで、たちまち大騒ぎになつた。二階の窓からは、「陣中新聞南十字星」と書いた大きな旗が風にひるがへつてゐる。街では部隊の移動が行はれてゐるらしく、懷中電燈の灯が默々とうごき、大地をえぐるやうな戰車の音が夜空にひびいてゐる。

ときどき、砲彈の唸りが遠くから聞えてきたが、あらゆる騷音が大鼓の音の中に吸ひ込まれてゆく。

次の日はいよいよ大晦日であつた。その日の覺え書きをひろげてみるとかう書いてある。——「朝は昨日と比べると、ずつと涼しいが時間が經つにつれて段々と暑くなつてくる。もう內地の大晦日なぞは想像も出來なくなつた。午後四時、一同帶劍して班長のところへ挨拶にゆく。一時間ほど訓示があつた。昨夜無名の少尉から聽いた上島部隊長の戰死はやつぱりほんたうであつた。五時すぎ、向井、田中、石坂、それに印刷の長利君を誘つて何時もの川に水浴にゆく。十二月三十一日に川で水を浴びるなぞといふことはまるで夢のやうなはなしだ。かへりみち、竹林の道をぬけると椰子の林の上に晝の月が出てゐる。味も素つ氣もない風景である。夜は望月少尉を中心にしてマニラへ入城してからの任務の打ち合せを行ふ。夕刻になつて、いよいよ明日出發と決定したといふことを鈴木榮二郎君が傳へに來た。私は何といふこともなしに疲れてゐる。しつかりしないといけないぞ。今（日出海）君の捻坐もハッキリしないらしい。今夜は寺下君のとつてきた鷄を喰べるのが樂しみだ。もう喰ふことゝ川で水浴することのほかに樂しみはない。田中君が門松の繪を描いて入口の扉に貼りつけた。急がしく強引な正月である」。

私たちが宿舍の二階で酒宴に興じてゐるとき、上島支隊のタルラック進擊が敢行されたのである。そのことを私たちは朝になつてはじめて知つたのだ。上島支隊がいかに困難な戰鬪を繰返してきたかといふことは上陸以來各地に分散してゐた部隊を再び急速に集合しなければならなかつたことをもつてしても充分理解されるであらう。部隊長はアグノ河の線において隷下の兵力を集結しようとしたがすでに橋梁も道路も破壞されて連絡はほとんど成らず、しかし、さうかといつて時を過してゐたのでは進擊急なる土穐部隊（軍主力）と歩調を合すことも困難である。そ



矯正図書館



「サンフェルナンド」

サンフェルナンドはバタアンの關門である。此處に戰闘司令部があり、前線へ動く部隊が此處に集結し、待機してゐる。總攻撃の準備が整つたのは三月十四日で、われわれの宣傳部隊も五つの小隊に分れて前線へ出發した。第一小隊はバタアン西海岸、モロンの線、第二小隊は東海岸、第三小隊は、オラニの線、第四小隊はサマット前方の最前線、ほかに準備小隊二個。

私たちの宿舍は町角の橋の手前にある宏壯な二階家であるが、窓の戸がみんな外れてゐるので風が吹きとほしてゐる。街はほとんど原形をとどめぬほど爆撃と砲撃でうち壞され、生々しい戰禍のあとが見るも無慘であつた。椰子の林も半ば枯れ、燒け殘つたトタンのあひだから芭蕉の芽が青々と伸びてゐるのも哀れがふかく、往來の電線には、Long Distance Telephone Sanfernand, Panpanga Province と書いた白い額がぶら下つてゐる。私たちは此處で絶えず前線とのあひだを往復しながら約一月をすごした。橋を渡つて左に折れ堤防づたひに歩いてゆくと右手の廣場に難民區がある。家を失つた良民が、燒け殘つたトタンや古材木でバラックの小屋をつくり、軍の施米によつて生活してゐるのであるが、一日一日と數がふえ、半月近く經つあひだに、廣場の片隅が市場になつた。生活が徐々に整頓され、あたらしい建設がはじまらうとしてゐるのである。難民區の入口にある掘立小屋の土間には脚の折れたテーブルや、椅子が据えられ、急造の喫茶店が出來た。兄妹五人で經營してゐるのである。若い娘さんがゐるので店はあふれるやうな客で繁昌してゐる。その客と言へば、實は私たちなのであるが、彼女たちもだんだん日本語を覺え、片言で愛想を振りまくやうになつてきた。市場では、マンゴーや乾海老を賣つてゐる。

積亂雲

ハタアンの空は午後になると積亂雲に掩はれる。入道雲が湧くやうにひろがり、見惚れてゐると視野が狂つてしまふ。バタアンが陷ちてから積亂雲の美しさが急に際立つてきた。四月二十日の朝であつたが、私と渡邊少尉とはマリベレス港を越え、西海岸につづく峽谷道路の上に出れ故、つひに意を決して僅かに一個中隊の兵力をもつてタルラック進撃を行はざるべからざるに到つた。かくて晝夜兼行、間道を縫つてタルラックに進み、十二月三十日、つひにこれを陷れたのであるが、しかし、この無理と强引を極めた戰闘において上島部隊長は比島戰線の花と散つたのである。その夜、宿營の前にある廣場では、管理部の餅つきがはじまつてゐた。大きな戰爭のかげに、「動」と「靜」とがからみあつてゐる。私は築しさうな人の影のちらつくのを眺めながら感慨の胸に迫るのを覺えた。

備の前發第

でどが

をれ

をるまたこ

た。積亂雲に向つて自動車を走らせてゆくうちに道をまちがへたらしい。片側はふかい峽谷であるが、前には敵の陣地があつたらしく到るところに上衣、ガスマスク、鐵兜の類が散亂してゐる。眞晝の深山はしづまりかへつて鳥の聲も聞えぬ。そこへ、砲聲が山の寂寞をやぶつてひびいてきた。それがだんだん近づいてくる。渡邊少尉に訊くと敵か味方かわからぬといふ。おそるおそる元來た道へ引つかへすと、海をへだてゝすぐ手前にうかんでゐるコレヒドルの要塞砲の砲口がキラキラと光つてゐる。渡邊小尉の顏がひきしまつてきた。彼は落ちついた聲で、擊たれても車を止めるなと運轉手に向つて注意してゐる。こいつはやられると思つた。

運轉手が狼狽したせいか眞つ直に道を走りだしたので渡邊少尉が怒鳴りつけた。此處でまごついてはならぬ。私は思はず息を呑んだ。一氣に走りつづけ、やつと山中の渡邊小隊の宿營に着いたのは夕方である。ほつとした思ひであつたが、砲聲はまだ續いてゐる。みんなが水浴に行かうといふのでいつしよに溪谷を下り、流れに浸つてゐると、アメリカ兵の俘虜が二人素つ裸體のまゝ岩の上に立つてゐる。褌を洗つて岩の上に乾しておいたのがなかなか乾かぬので乾くのを待つてゐるうちに私ひとりきりになつてしまつた。ときどき頭の上を砲彈がかすめてゆく。ぐつたり水底に足を伸ばして仰向きになつてゐると、空の殘光を映した積亂雲が、密林の梢とすれすれにうかんでゐる。美しく切ない風景であつた。

刑政第56巻第4号
矯正図書館

日本の山の美しさ

深田久彌

日本の國民が昔から山を崇め尊んだ一因は、わが國の山が多くは火山だつたからであらう。噴火によつて出來た山は、みな姿が端正で、廣々と美しい裾を引いてゐる。富士山がその最たるものだが、各地の名山と稱せられるものも、大ていはこの形を備へてゐる。そしてその土地の名を冠して何々富士といふ風に呼んでゐる。

西洋で今のやうな登山の趣味がはやり出したのは、十八世紀の終り頃からで、それまでは彼等は山に對して恐怖を抱いてゐた。山は彼等に死と破滅との脅威を感じさせ、中世の基督敎は山を惡魔の住みかとさへ考へたといふ。歐洲の山の多くが、岩と氷河で鎧はれた、嚴めしい近づき難い貌を持つてゐたからであらう。だから彼等にとつては、山に登ることは一つの鬪爭であつた。

しかるにわが日本では、昔から山に挑戰するとか山を征服するといふ言葉はなかつた。お山參りと云つて山へ登ることを神聖な行事とさへしてゐたのである。といふのも、わが國の山は惡魔の住みかどころではなく、既に萬葉の時代から山を神の在ます所として打仰いでゐたからだ。

それほど山を崇敬し、朝夕眺めて倦くことを知らなかつたのも、つまりわが國の山が崇高優美で、人々の感情がこれによつて淨められ高められる氣がしたからであらう。外國にも形のよい火山がないわけではない。しかしわが國の山はその端麗さに附け加へて、更に氣象の變化の美しさがあるのだ。昔からわが國のどんな山の繪を見ても、雲の配せられてゐないものはない。山岳寫眞などでも雲の添物がないと頗る物足りない。實際に登山する身になつてみると雨は嫌なものだが、しかし旅の宿に寢ころんで、雨や霧の間に出沒する山を眺めてゐると、日本の山がいかに微妙な美しさに富んでゐるか、つくづくと感心する。芭蕉が雨天の富士山に對して「雲霧のしばし百景をつくしけり」と詠んだことも肯づかれる。山岳畫家の足立源一郎氏がいつか北アルプスを縱走されて、數日間あまりの快晴つゞきで却つて興を殺がれた、とこぼして居られたことがあつたが、全くそんな不平も云ひたくなる位、我々は雲や霧の山に馴染み深いのである。外國の山の寫眞に何か倦きたらないのは一點の雲なくカラリと晴れた景色ばかりが多いからだ。その雨や雲が又わが國では一樣ではない。例へば俳句の歲事記を見ても、春雨、さみだれ、初時雨、夕立、八仙、卯の花くだし、といふ風に、雨の種類だけでも尋常ではない。しかも名稱が違へば違つたで、その間にごく微妙なニュアンスの差異があるのである。スコールだけしかない南洋に比べて、又は吹雪だけしかない北の國に比べて、何と複雜な變化に惠まれてゐることであらう。雲にしたつて、豪快な入道雲から、纖細な鱗雲に至るまで、あらゆる形と色を見ることが出來るのである。霞、霧、靄、霎、雹、霰、等等、これらの雨カンムリがいかに多く我々の日常に現れることか。日本の藝術が自然と深い關はりのあるのも無理はない。そしてこれらの現象

日本の山の美しさ

深田久彌

が代り代つて日本の山を變化づけるのである。

これは山に就いてだけではないが、わが國の自然がいかに微妙な蔭翳に富んでをり、それが國民性に影響を與へてゐるかは、文學を振返つてみてもわかる。萬葉集の大半は自然を歌つてゐる。枕草子その他の隨筆類を見ても、作者が自然の變移に敏感であることはおどろくほどだ。季題を離れては存在しない俳句の如きは、全くこれと自然との融合である。更科日記、伊勢物語、東關紀行、海道記、十六夜日記など、これらわが國文學の古典と稱せられるものが一種の紀行文學であり、從つて風景の描寫に心をそゝいでゐることを以てしても、自然と生活との間に切り離せない關係のあることが會得出來よう。

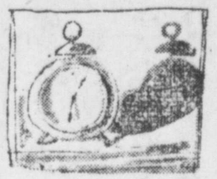
一たい世界のどこに、こんなに古くから、これほど自然の精妙さに眼を向けた國民があらうか。ルソーのやうに「自然に歸れ」と魂の淨化を叫ばなくても、わが國民の情操は知らず〳〵のうちに、惠まれた自然の美しさによつて涵養されてゐるのである。戰爭前までは、「持たざる國」などと云つて物資の乏しいことを案じられてゐたが、我々の情操を養ふ自然に關しては、實に「持てる國」だつたのである。そしてこの精神的な富があつてこそ、こんどの大戰果をあげ得たのかもしれない。

四季の變化のこれほどとり〴〵な風土もないだらう。一つの山でも、そこへ登る時季によつて、全く趣を異にしてゐるのにおどろくことが屢〻ある。春の新綠、と一口に云つても、決して一樣な綠ではない。よく見れば木々によつてその色にもそれ〴〵の違ひがある。秋の紅葉も同じこと。そしてこの新綠や紅葉のさま〴〵の美しさは、山深く入つて行くほど顯著になる。嘗て僕は中支・北支の秋を旅行したが、向うでは紅葉する木の種類が少なく、どこを眺めても單調な氣がした。紅葉ばかりではない、山のただずまゐでも河の流れでも、どこか大味で、日本の風景のやうなキメの細かい美しさには缺けてゐた。なるほど揚子江や黃河は濁流滔々として眼を見張らせたが、しかし僕はそれを見ながら、日本の清楚な溪流を思ふこと切であつた。

溪谷の美しさ、これも日本の山にだけある富ではなからうか。溪谷を離れてはわが國の山岳美を說くことが出來ない。地質學的に云ふと、日本の山を構成する岩石は浸蝕に適してゐるのださうだが、どこの山へ行つても見られる美しい浸蝕谷は、雨量の多いことと相俟つて、美しい瀨となり淵となつて、溪迎に暇ない思ひをさせる。廊下、ドロ、ナメ、カマ、ゼン等、昔から山に住む人の間に溪流に關する語彙の豐富なことを見ても、いかに溪谷がさま〴〵の景を呈してゐるかが察しられよう。

日本には世界に高さを以て誇るやうな山はない。しかしその姿の美しいこと、しかもそれが無限の變化や蔭翳を持つてゐることは、おそらく地球上に類がないのではなからうか。この東亞の小さな島國の民族が、その無比の自然と共に、無比の精神を持つてゐることは不思議ではない。

刑政第56巻第4号
矯正図書館



隨筆・教育者（中）

添田知道

由信

龍之輔は、實行家ではあつたが、われと存分に納得のいかぬ内は、決してこれを行動に移さなかつたのである。そこに彼の「思索家」がゐた。

そして又、いつでも行動に移し得るほどにそれが一つの確信となつてしまふと、もはやそれは容易に動かし難かつた。そこに問題がないのではないが、此の「考へる」習性は既に少年時代、蓁はれてゐたことがわかる。

繊弱な龍之輔は、一般の少年のやうに、故郷の山野にかけ込むといふやうなことも殆どなく、家居に終始してゐたやうである。五六歳から、父母のやつてゐた寺小屋式の授業を傍らにつぐなんで瞰めてゐたのである。そして机の虫となつたのだが、通例の「子供の遊び」といふものを持たなかつたから、いつもつぐなんでゐるところに勢ひ物を考へる習性が生じたのだらう。

勉強には熱中した。躰の弱いことで身邊の心くばりに怠りのなかつた母が、勉強だけはいかに夢中になつても止めたことがなかつたといふ。信仰にあつい母は、龍之輔の無事成長を祈願して、八王子の道了や、尾崎の地藏や、拝島の大師等々の參詣を缺かなかつたが、勉強のためには隣村増戸村山田の天神社に詣つてゐた。

龍之輔が高等を卒業した時は、母は御禮に梅の木を五本、増戸の天神社に献植したといふが、これが後年、南村で、卒業生の進物を斥け、代りに校庭に桐の木を植ゑさせたことのヒントになつたものかとも考へられる。

たゞ一つの愉しみといへば、小鳥を飼ふことであつた。十一二歳から十六七歳へかけての道樂としては少しぢゝむさいが、面倒のない粒餌ですむ野鳥を飼ひならしたのである。

それがどんなきつかけからはじまつたのかは聞き洩らしてしまつたのであるが、淵江の三左衞門といふ、舊家の老人に連れられて、辨當もちで大和田といふ八王子の河原へひばりをとりに行つたことなどを、ある日先生は思ひ出愉しさうに語られたのだ。

兄は、小鳥いぢりなど勉強の邪魔だと反對したが、母は、氣保養になつてよいから、とゆるしてゐたといふ。

しまひにはそれは六十三籠まで達したさうであるが、だんだんに飼ひ馴らして、よく啼く目白が殊に藝當をするやうになつた時、庭木にかけておいたその籠に、蛇が入り込み、目白をのんだま〻出られずにゐたといふ話もされた。

細い觀察と、小さいものへの慈しみの心は、かうした裡にも培はれてゐたのであらう。

溫良從順そのもの〻少年期であつたが、十一歳、父に死別した年である。はじめて無盡の掛金集めに出された。村には急場を救ひ合ふために賴母子講が立つてゐた。東秋留の方へ行つた時であつた。ある家の主が、此の小さな集金人に、

「兄さん、お使ひは御苦勞だが、一體受取が書けるのかい。」

と言つた。龍之輔は言下に、

「書けなければ來やしないよ、小父さん。」

と答へたのである。

それは無意識に出た言葉に違ひな

い。しかしそれだけに、私たちはそこに龍之輔の底なる自信のほどを窺ひ知らされるやうである。

學校で習つたことが、そのまゝ直ちに實生活に生かされるのでなければならないといふ實用主義は、此の無盡集金に於ける體驗から來たのだと先生は私に言はれたが、それにしても、意氣地なしだと叔母に地團駄をふませ、女の子と間違はれたほどだといふおとなしい少年の、偶發的な一言に、はじめて、後年の龍之輔の鋭鋒を感じられるのは興が深い。

血氣猪突の氣と、意外な老成ぶりとが交錯する性格の由來が、此の少年期に探られるやうな氣がする。

環境

やんわりといたはり抱へるやうな家庭の雰圍氣の中へ、嚴格で短氣な石野英夫といふ教師が入り込んで、假借なく龍之輔に對したが、あまりにも龍之輔は幼く、未だそれを充分にうけとる用意は出來てゐなかつた。

なんといつても、龍之輔を絶望の底から、手をとつてひきあげてくれたのは、神奈川師範の田井先生である。

龍之輔の人生行路に、田井先生といふ人が現れなかつたとしたら、その生涯はまるで違つたものになつてゐたらうと思はれる。當時の師範には、色々と偉い先生がゐた。更に外邊にあつては淺水遑太郎の如き名人もゐたが、それらの偉い先進から人格的營養を攝取することも、悉くが、田井先生に愛情を以て導かれたことからはじまるのである。

龍之輔にその資質があつたからこそではあるが、しかし「坂本龍之輔」は、まつたく多くの人の複合體なのである。人々の資質には、他の影響をうけない型と、あらゆるものからうけいれつゝ一つの型をつくりあげてゆくものとがあるやうに思はれるが、龍之輔は後者に屬するものであり、その開眼が田井先生に依つてなされたのだ。

私は坂本龍之輔の傳記を書いてゐるのであるが、傳記といへば、人たちはすぐに偉人傳のやうなものを想像するらうである。私は、「偉人」を書かうとするのではない。その意味では坂本龍之輔はまつたく無名なのであらう。その無名であるところに、此の仕事の意味があるのである。

名をもとめず、只管仕事の實に埋沒して終つた一教師の生涯に、大いなる民族の息吹を聽きたい念願なのである。「坂本龍之輔」を描かうとすることは、いまだ私の感情なのであつて、實は坂本龍之輔を通して、日本のある時代を描かうとしてゐたのだといふことを此の頃になつて、私は思ひはじめてゐる。

とまれ、坂本龍之輔は、その環境（人と時代）がこれをつくりあげたのである。そこに環境の重要さがある。私たちと雖もそれぞれ環境に依つて育てられて來たのであるが、今日環境をなす一人々々の中には、また私たちもあるのであり、それが人間を如何やうにも作りなすのだといふことを思ふと、寧ろおそろしいほどである。そしてこゝに深く思ひをひそめなくてはならないのだと痛感させられる。

個と環境とは、相作用して循環する。その循環のかたちの上に、個の有つところのものが自づから滲み出るのである。

田井先生は、龍之輔をして、強く、大きく生くべく、これを導いてゐることがわかる。その機緣は、師範本入學に落伍を覺悟し、自己の運命を投げようとした瞬間に、恩愛の手をのばされたことにあつた。しかし恩愛の人は同時に峻嚴きはまりない教師であつた。ひとたび恩愛に泣いた龍之輔は、その峻嚴に堪へ抜くことを己れに誓つた。そこにいのちの火が發したのである。

わが子にも假借のない田井先生の峻嚴と周到さには頭が下がるばかりであつたが、その一面の、田井先生の人間味は、隨所に滲み出てゐる。龍之輔は寄宿舍に於て、制服の襟がよごれてゐるのを田井舍監から指摘叱責されたが、それが、龍之輔が小男であるために、高い寮舍の洗面臺では樂々と顔を洗ふことが出來ず、どうしても頤に雫が垂れて來る。そのためのしみであることを知つた田井先生は、「坂本さん、手拭を首に卷いておいて、お洗ひなさ

刑政第56巻第4号
矯正図書館

い。さうすれば襟は汚れないでせう。」と注意してくれた。龍之輔が後々までも手拭を襟首に巻いて洗顔する習慣は、此處からはじまつたのであつた。

嚴格ではあるが、決して窮屈さを感じさせなかつたところ、田井先生は天賦の良師だつた。

寄宿舎では、毎土曜日の夜、生徒たちは茶話會をやつたが、見廻つた田井舎監は、無雜作にその中に入り込み、一緒になつて話し込んだりする。ある時、順次に一口話をやつてゐるところへ入つて來た先生は、「私もやりませう」と細い聲で云つてから、

「——ある夏、いんきんたむしにかゝつて困つたので、お醫者のところへ行きました。お醫者は容體をきくと、なんと、すり鉢を出して來て、患者を前に悠々と胡麻をすりはじめました。暫く默つて待つてゐたが、どうも少しへんなので、（先生、私の方はどういふことに——）とおそるおそる訊いてみると、（うむ、待て待て、だから今藥を作つてやつてゐる）と、ごりごりやつてゐる。（先生、それはまさか藥ちがやありますまい）といふと、お醫者は落ちついて、（なに、これが何より一番さ。それ、いんきんの胡麻よごしツてね）」

色の黑い、眼の小さい、出ツ齒の田井先生が、にこりともせず、さう言ひ放して、すつと立つて行つてしまつたのが、よけいなをかし味で、生徒たちはどつと笑ひはぜたといふ。

女裝

田井先生は生徒のどんな些細な缺點も見のがさなかつた。龍之輔は油斷も隙もならなかつた。何處にあつても絶えず田井先生の底光るどんぐり眼を感じるのだ。それだけに、己れをひきしめて行くことが出來たのだといへよう。

それがそのまゝ、龍之輔後年の姿に見出だされる。彼の注意は生徒の一人一人にゆきとゞいてゐた。

南村時代、放課後、つねに生徒の狀況視察に廻つてゐるが、道草をくふ子供を監視する眼は鋭かつた。川に入つてゐる一團を見つけると、脫ぎ捨てゝある着物をそつと草叢に隱しておいてから、ぬつと姿を現すといふやうなこともやつてゐる。

慌てゝ岸にとびあがつて來る裸の子らに、ひとわたり困らせておいてから、笑ひながら着物を出してやる。叱責を言葉にしなかつたが、子供たちにはしみ込んだことであらう。（その生徒たちが今その村の主力となつてゐるのだが、先生に叱られたことほど強く印象に殘り、そのことのありがたさが後に至るほどよくわかつて來るといふ聲々を私は聞いた。）

品行點に重きをおいた。無駄遣ひをするな、買喰ひをするなと教へる。その效果を見屆けずにはをれない。生徒たちはいつの間にか、自分たちの行動が、先生の手帖に記されてゐることにおどろく。いつ、どこに、先生の眼が光つてゐるかも知れない、と生徒たちは思ふ。

龍之輔自身、此のスパイ行爲について反省してゐる。子供たちを信じないやうで、如何にも心苦しかつた。しかしその教へるところは、生徒の日常坐臥に具現したければ意味はないのである。教室で唱へることに終つてはならない。そして寧ろ、生徒の實際のありやうから、更にいかに教ふべきかを探りとつてゐたのである。

理念と生活とを一致させる。學校の內と外とを別々のものであらしめてはならない。そのためには、いかに心苦しくても、その生徒の全生活を見通してゐなくてはならぬ。——寬容が美德の如くであつても、みすみす、子供が誤りを犯すのを見のがしてゐたとしたら、その將來をあやまることになるのだ、といふのが龍之輔の考へ方であつた。

そして生徒の校外生活狀況視察はつづけられた。

その龍之輔が一度失敗?をした。

南村では、自分の赴任以前の卒業者、所謂村の「若い衆」を集めて、夜學會をやつてゐた。算數、十八史略、國史略、文章軌範などを授けたのだが、修身は、茶菓子をつまみながら、座談的にやつてゐた。

青年の行動が子供たちに影響すると

ころは大きい。子供は一々見やう見眞似で育つてゆくのである。その一番近い模範となるのがこれらの青年であるのだから、その氣風を等閑に附することは出來ないのだ。

渾然一體の村の風をつくりなさなければ、學校で教へるところも意味をなさず、生きては來ない。夜學會は直接には青年を指導することではあるが、それこそが、學校の生徒全體の上にかかる問題なのである。

これが龍之輔の夜學會をはじめた理由であつた。

秋になつて祭がつゞくやうになると、各字の有志から、先生への招待が來る。村の慣例である。龍之輔は此のおよばれをいつも謝辭してゐた。しかし祭にはちやんと出かけてゐた。視察である。

成瀨の祭の夜であつた。目立たぬやうにするためには、いつも多少身のまわりに氣をつけてはゐたのだが、その時ふと、女裝することを思ひついた。

その時は結婚した後である。妻の着物を着てゐるところへ、壽司屋の媼さんがやつて來て、笑ひながらその女裝を手傳つた。シャツをまるめて頭の恰好をつくり、おこそ頭巾で眼と鼻だけを見した立ち姿を見て媼さんが、

「いゝ娘さんが出來ましたよ、先生。」

と笑ひ止まなかつた。躰が小さく、撫で肩で、色の白い龍之輔だつた。

闇夜だつた。成瀨の杉山神社は境內が田甫の中に島のやうになつてゐた。乾いた田へ舞臺をかけて、芝居をやつてゐた。村の者がやるのである。その字には俳優の鑑札を持つてゐる者が二十人ほどゐた。（花火師もゐた。）

飮食物の露店も出てゐた。祭の賑ひに龍之輔もまぎれてゐたが、小さな子供たちからだんだんにひきあげてゆくのに夜の更けて行くのがわかつた。

ひきあげようとした時である。二人の青年が彼のあとに隨いて來るのに氣づいた。二人とも夜學會の會員だつた。一人は烏賊の煮たものを買ひ、一人は鮨を買つて喰ひながら、「送つて行かうか」と言ひかけて來た。

喰べろ、といつて兩方から、烏賊と鮨をつきつける。かまはず歩いて來るとゝ顏々を見わたして、さりげなく、

「時に、——芝居の夜に、紫縮緬のおこそ頭巾の娘がゐたのを知つてゐるかね。一人の青年が、烏賊を買つて、喰べろ喰べろとすゝめてゐたが、——誰も知らんかつたね。」

「先生、どうしてそんなことを——」

一人が訝しさうに云つた。二人の青年はつと眼を外らした。

僕は夕刻から行つてゐたのだよ。人間には表裏があつてはいけない。學校卽社會だといつてゐるのは、こゝだが——それだけぢやない、長坂に、女のお化が出たさうぢやないかね。え。」

そこまでいふと、一人の青年は頭をあげ得なくなつてしまつた。

そして、次の夜學會から出て來なくなつてしまつた。

龍之輔は、しまつた、と思つた。

やり過ぎたのである。興に乘つてはいけない、としみじみ思つた。

禮服

簑を被て通學區域を廻つたやうな龍之輔である。服裝はいつも、双子の筒ツぽに、木綿の袴であつた。

刑政第56巻第4号
矯正図書館

開校式の壇上挨拶がその姿であつた。その、書生々々した貧弱な身なりは、いきなりには村人の輕蔑を買つたのである。

しかし、兵隊送りにも、村内の葬儀にも、卒業生の祇禮にも、いつもそのなりで押し通してゐた。そこに一面、氣安さと親しみが生じて、「今度の先生は金がかゝらないからいゝよ」と云ひ出す村民もあるやうになつたが、あまりの無雜作に、

「なんぼなんでも先生、それでは間に合はないことが出來て來ますよ。」

如何にも安ツぽい。校長ならば校長らしい格式を具へてくれなくちやア、といふ抗議をこめて、役場の者が言ふと、彼は、

「なに、そんなことはありませんよ。私は、生徒に教へる服を以て、最上の禮服だと心得てゐます。教場は神聖なところです。勿論、いくら教場にあつたからといつて、生徒だけでも、又教師だけでも、その神聖は成り立たないので、つまり、教師と生徒とが、相合して、一心に物を調べる、考へるといふ、その心から來る姿が神聖だといふのですが、その教場に臨む服が、教師にとつては何よりの一番の禮服であるわけですからね。」

さう答へた龍之輔には、恰好ばかりつけたところで實が伴はなければ意味はないといふ心があつたのであらう。

粗服を以て甘んじた龍之輔は、又生徒たちに對しても、その服裝の如何に依つて、扱ひを別にするといふやうなはづべきことはしなかつた。むしろ貧しい故に、いじけ易い幼い心を、ひろく、大きくのばさせることに努力した。

それが後年の、特殊學校の事業にまで發展するのである。

新刊紹介

☆南方紀行

吉川英治著
B6版、二九七頁、定價金二圓
（全國書房）

さきに朝日新聞に連載された南方見聞記である。著者は戰渦生々しい比島に飛び、闕印を探つて、脆くも崩れ去つた敵性文化に鋭い批判の眼を向け、北邊の重要性を念頭に置きつゝ南方の實態を摘破する。われわれは、この流麗な行文のうちに、南方圈に對する認識を、恰も旅する者の樂しき心境のうちにあつて自ら深むることを得るであらう。

☆海戰

丹羽文雄著
B6版・二九六頁、定價金一圓八十錢
（中央公論社）

著者は昭和十七年海軍報導班員として第一次ソロモン海戰に從事し、我が旗艦に乘組むことを命ぜられ、壯烈なる海戰の實際をその五官を以て具さに體驗したのであつた。ツラギ海峽に於ける凄烈にも亦美しき夜戰を、身に敵彈を受けて血まみれになりながら、かくも生々しく、かくも仔細に、スケッチし得たことはそれだけで既に驚異に價するものである。

陸戰における戰爭小說の首位に「麥と兵隊」をあげるならば、ひとは、海戰におけるそれの首位に在るものとして本書を推す。本年度のベスト・セラーとして輝やしき業跡を占むるに至るであらうことを信ずる。

☆レントゲン

ネーエル著
常木實譯
B6版・四〇六頁、定價二圓三十錢
（天然社）

本書は、一學徒として自己の天分を知り、絕えず刻苦勉勵し、遂に世界的發見をなすに至つた稀に見る眞摯な物理學者レントゲン教授の生涯を極めて興味深く物語つてゐる。すなはち、X光線の發見及び使用法を公にする經緯を描き、その間夫人との美しき生活を點綴し、更に、近代勃興した電氣光學の多端な歷史を挿入し、たくみな小說的手法を以て科學知識の紹介につとめてゐる。さきに、獨逸新興生産文學として特異な形式を以てわが小說界に喧傳された「アニリン」（文協推薦）や「硝子の驚異」（カール・ツアイス、アッベ、テッサー等を主人公とする）と共に同一系列に屬する新興科學小說であるが、これらは孰れも新時代人の注目を要するものといふべきである。



母を喪ふ

訪令海

二人の姉とやつと、初めての誕生を迎へた私を殘して、父が亡くなつたのは母が二十六歲の時でありました。その母がこの間八十歲の芽出たいお正月を迎へたのでありました。私たち夫婦と女學校一年の玲子と國民學校初等科三年の了我と一家四人揃ふて元旦のお屠蘇を祝ふたとき、

「おばあさん、あなたは今日八十歲のお正月を迎へなさつたのですよ、ほんとにお芽出たう御座います」

と、いふと。

「まあ、さうかいのう、私はもう八十になつたのかいのう、みんなこうして揃ふて、まめでお雜煮餅を祝はせ頂くことができるとは、ほんとに勿體ないことぢやのう」

と、いかにもうれしさうにみんなの顏を見まはすのでありました。

お芽出たい話を一抽私たち夫婦で運吟して「一億一心は先づ一家の一心から」と大東亞戰第二の新春をこうして迎へて間もない七日の朝、母は何の病いといふこともなく安らかに往生の素懷をとげたのでありました。

□

母は世間でいふ賢夫人といふやうな型の人ではありませんでした、隨分いたづら小僧であつた私に曾て一度も賢こさうな言葉をならべて訓戒めいたことをきかされたことはありませんでした、むしろ愚直純誠の人といふのが適當であつたと思ひます。

母の望みは、やつと誕生になつた私を、これから一人前に育てあげるといふことであつたのでありませうが、さてその幼い子がまめで育つか育たぬか、どんな放蕩者になるやら、まことに雲をつかむやうな望みなのですが、母としてはそんな將來を打算的に考へる餘裕もないほど、ただ我が子可愛さの一念に燃えたつたのであります。

貧しい寺門の經營にはひとなみならぬ苦勞を重ねて來たのでありました。街のまん中に住んでゐるのに、母は幼い私を背負ふて小さい姉たちをあやしながら米や麥も搗きました。私たちの着物にしても買ふて着せられたことはありません、みんな母が織てくれたものです。

こどもながらに、こうした母の苦勞溫情を察してゐた私が、何とかしてこの母に孝行がしたいといふ心をもつやうになつたのは五つ六つの頃からであつたと思ひます、好きなお母さんに孝行がしたいと云ふのですから、これ程たやすいことはない筈ですが、實際はなか〳〵それができないで、またしては我儘をいふたり、癇癪をおこしたりして母に心配をかけるのでした。

とてもほんとの孝行ができぬ私は、せめて孝行のまねでもするより外に仕方がないと思ふて、母の手をとつて親鸞聖人の御舊跡めぐりをしたのは數年前のことでありました。そのときの母のよろこんでくれたことは、全くこの世に生れてきた所詮を得たといふほどのよろこびかたでありました。

この樣子をみた私はしみ〴〵親のまことといふものを感じたのでありました。ただまねごとにすぎぬこの私のしたことをよろこんで眞實まことととして受けとつてくれる親のまこと、私にまことはないが、この親のまことの前に頭のさがるとき、親のまことが私のまことなつて下さるのでありました。

私の親に對する道は、私が親につかへるのでなかつた。親が私につかへて下さる、そのまごころを唯仰ぎ拜んで行くことの外にないことに氣づかせて頂いたのでありました。

□

刑政第56巻第4号
矯正図書館

アメリカに傳道をつづけて五年目に皈つてきたときに感じたことですが、

アメリカ人の雰圍氣の中に生活してゐたときに眼にうつつた老人は、全く廢物そのものといふ感じでありました。舊い歴史をもたず、ただ溌剌たる中に新らしい物の建設に突進してゐる社會では働く力のすりへらされた者はもう見捨てられて全く廢物視されてしまふのでありました。

戰前、盛に日本へ輸入されてゐた、レーズンといふ干ブドーの産地であるカリホルニヤ洲のフレスノといふ街に住んでゐたとき、私の住宅の隣りにアメリカ人の老夫婦が住んでをりましたが、夏になるとサンフランシスコの或會社に勤めてゐる息子夫婦が休暇をもらつて二三週泊りがけで來るのですが、皈つて行くときにはちやんと宿料を仕拂ふて行くのです。たとへ親のうちでも宿料を仕拂ふのが當然のやうに思ふてゐるのです。若し息子が横着をかまへて宿料を仕拂はないやうなことがあれば容赦なく宿料を請求するのです。この人たちの心根には子供の獨立心を養ふてやりたいといふ、さうした日本流の考へ方からではなくて、つまりは自己の安全安樂を計らうといふ自分勝手な個人主義的の考へからきてゐるのであります。

或夏にロサンゼルスのベニスといふ大きな海水浴場に遊びに行つたことがありますが、そこに「ベビー・バンク」といふ大きな建物があるのです。ほて妙なものがある、「赤ん坊の銀行」といふのはどういふのであらうかと近づいてみると、そこには多勢のこどもがゐるのです。どうも合點がゆかぬので「これは親のないこどもたちをあづかつてゐるのですか」と、守りをしてゐる保姆にきゝますと「何を馬鹿なことを……この子たちの親たち夫婦は今海水浴に行つてゐるのです、折角夫婦で樂しみに來たのにこんな子どもがゐては邪魔になるではありませんか、だからこゝへ預けてをくのです」と、いかにも當然のことのやうに答へて、私の顏を見返へすのでありました。

□

私の母はもう八十歳にもなつてゐて、近頃では大分老耄の氣味もありましたし、家の中でも何の役にもたたないやうに思はれてゐましたが、さてなくなつてみると、何だか家に奥行きがなくなつたやうな淋しさが感ぜられるのであります。母がゐてくれたときは、人と應接しても、「まだ奥がありますし」といふ何んとなく力強さ潔さが私の背景になつてゐてくれたやうですが、今では、家が玄關だけで奥がなくなつたとでも云ふやうな心淋しさを感ずるのであります。

南のたより

○月○日餘暇を得て○○○○刑務所を見學する。驛より馬車にて五分、人家まばらな中に草色に塗られた高さ三米餘の塀が見られる。正門塔上に日章旗が翻へり、門札は木の香も新しく〝○○○○刑務所〟と記されてある。

案内せられて所内を見る。各見張には機銃探照燈を有し見張看守は騎銃を持つてゐる。

監房は恰も動物園の檻に似て教化的効果を期待する事は困難だと考へられるが、氣候風土習慣を異にしたる當地に於ては健康衞生上適當であると謂ふ。

數坪と見られる中に六―八人位の收容員であつた。塀を以て嚴重に分隔された各舍房には出役者を除く殘留者がなす仕事もなく、或は話し或は寢ね又は石様の物を並べて遊び、甚だしきは煙草を喫してゐる。喫煙は職員囚人共隨時許されてゐる由で各所に火繩が備へられてある。

職員の勤務も内地のそれに比す可くもないが、特色はタンビンとかホールマンと稱する獨歩、雜役様の者があり、棍棒を持つて服裝も役人に似て居り、非常な權限を持たしてある事である。

味噌工場の隣が第三分區で病舍である。此の日の病舍總員一六五、マラリヤ、デング、結核その他である。若き保健技師は原住民でスラバヤ醫專出の醫者である。

第四分區は雜居房で、四ヶ舍房に七六一名拘禁されて居り、心神耗弱者の他、外人も居り、少年も十八名ゐた。その一人に何歳かと問ふと、十歳と答へたことである。玆に一名の部長、四名の看守が配置されてゐた。

第五分區は、大雜居房で大運動場を中心にして兩側に並んでゐる。小荷物置場に似てゐた。夜間閉房の際には一齊に施錠される仕組になつてゐる。案内した部長は混血の美晴らしく背の高い男であつた。

第六分區は木工場である。用材は主としてチークで、一六〇名の收容者が軍需品を製作してゐた。機械も製材場も内地と變らない設備で、二人の作業技手が忙しく働いてゐた。彼等は看守と同じ戒護權を有し、武裝をしてゐる。

第七分區では、チンフカルと稱する莫蓙を製作してゐる。バンタンと呼ぶ木の皮の如きものから作る。市價にて廿五錢位のもの、一人一日製作高一枚であるとの說明。一九〇名。

玆を出ると、見張所から〝異常ありません〟と日本語で報告した。見張はみな間近い處にたくさん設置されてあり、天井に鐵片が吊されてゐる。夜間戒護本部で一つ鳴らすと次々に逓られてまた本部に戻る。これで異常なしといふ仕組に出來てゐる。

見張の前の小分區には三十三名の殘留者がゐた。

第八分區は洋裁工場である。總員一八〇名、二四二臺のミシンが設備せられてゐる。續いて次の工場も洋裁、二百十六名、一三二臺のミシンがあり、裁斷場には六十五名の收容者がゐた。囚情は極めて平隱であるかに見え、最も活潑な作業がなされてゐた。

中央に作業事務所があり元所長代理であつた原住民が、作業技手等と何か打合せてゐた。素品倉庫には三名の職員と二名の收容者がゐた。凡ての物品は玆に保管せられ、物品課長とも謂ふ可き制度がある様である。

第九分區鍛冶工には八十六名。バケツやニューム食器類が作られてゐた。晝食時間らしく、各收容者は役席で日本のそれに似た皿に盛られた飯を手づかみで食つてゐた。別室に塗師工あり、寢臺、風呂桶、机等のラッカー吹付が行はれてゐた。

製品倉庫を見て本部前の通りに出る。傍の廣場では毎朝ラヂオ體操、遙拜等が行はれてゐる由。

別分區では四十名の女囚が舍房前の庭の手入をしてゐた。三十歳以上位の者が多く、二人の婦人部長が戒護に當つてゐた。其の一人はバタビヤ高等學校出身、四ヶ國語を解し、以前行刑局に勤務してゐたと謂ふ混血兒である。二人共仲々朗らかに勤務してゐた。

本部に戻り事務室を見る。

三室を有し、日本式の身分帳が作られてあつた。本部にて晝食後書類等を調査する。職員數二二九名。收容人員三八四三。

部長以上の平均俸給は一四二圓で看守のそれは二六圓となつてゐた。部長以上の學歴、宗教、國籍について見ると次の通りである。

高等學校	六	回教	一八
中等學校	二八	基督教	二九
小學校	一三		
インドネシヤ	一八		
混血	二六		
ドイツ	一		

之に反し、看守以下に於ては小學校出身、回教、インドネシヤが斷然多い。興味ある問題である。

歸途外塀に添ふた耕耘地で騎銃を持つた看守に戒護せられて數名の收容者が井戸を掘つてゐるのを見た。

栽培せられた南瓜が午後の強い太陽に當り乍らも青々と繁つてゐた。

カラン〳〵と鈴の音を立てつつ、馬車は私を停車場に送つて呉れた。

（爪哇――小林倉雄）

刑政第56巻第4号
矯正図書館



反樞軸陣營の同寐異夢

林　秀

外交講話

カサブランカ會談の後には、急遽アダナ會談が開催されてトルコに對する政治的手段が講ぜられてゐる。第二戰線は勿論のこと、北阿戰線に於て米國遠征軍が樞軸軍にやられることを英國は寧ろ歡迎するの風さへも見せたのも理由のないことではない。卽ち、英國としては獨ソ相殺こそ最終の目標であつて、ナチスが倒れても代りにボルシエヴイズムが擡頭したのではなんにもならないのだ。こゝに英國外交の苦心がある。

二

勿論しかしこんなことはソ聯としては百も承知、二百も合點である。だからスターリンはカサブランカ會談にも冷淡であつたし、印度問題（ガンジーの斷食）では逆に英國に喰つてかゝり、波蘭の亡命政權が領土恢復の提議をしたのにも一議に及ばずはねつけた。ソ聯をして言はしむれば、あれほど鉦太鼓の第二戰線は一體どうしたのか。第二戰線の實力が英國になければ、ソ聯は米英とは相談するまでもなく歐洲、西亞方面に自由行動をとつて見せるといふ意氣込みになつて來てゐるのである。チモシエンコの訪米を正式に否定したり、駐米大使で親英米派と見られるリトヴイノフの本國召喚が傳へられたりするのも、此の間の消息を語るものである。（リトヴイノフは英外相イーデンの親戚にあたる。）

このやうなソ聯の强硬態度に先づ驚いたのは、アメリカである。アメリカとしては未だ〳〵ソ聯の利用價値に見切りをつけることが出來ない。歐洲に於ける立場も英國程現實的である必要がないし、東亞に於て日本を打倒する爲にはどうしてもソ聯の一臂の力を藉りなければならぬ。それに、ナチス政權に對する憎惡觀に於ても英國は萬事算盤勘定でいくが、米國のそれは感情的生理的である。これは米國の政治經濟、文化の中心にユダヤ人が多く、從つて米國には半民族的な敵愾心が根强くナチスに向けられてゐることを物語る。

三

斯くて、獨逸に對する米英の根本的な心理上の喰違ひは對ソ態度となつて現れ、ひいては兩國の世界政策にも自ら溝渠の生ずる惧れなしとしない現狀にある米英の步調がとかく亂れ勝ちになるのはこの間の事情が如實に示してゐる通りである。そこへもつて來て一段と厄介な存在は重慶である。何しろ重慶と來ては着のみ着のまゝで怖いもの知らずの丸抱へである。大した實力もないくせに要求は次から次と無限にして來る、少しでも虐待すると、もう日本に降參するより外に方法はないと尻をまくる、さらばと言つて放つて置けば、日本に對する唯一の陸の足場がなくなつてしまふ。馬鹿らしいと知り乍らも仕送りを杜絶える譯にはいかないといふ事情の下にある。

前にも述べたやうに、米國の民族的な戰爭心理は常にナチス打倒の歐戰第

一主義になり易い。先づナチスを倒して然る後に日本を料理しよう、これが米國作戰の根底にこびりついた心理的な動きである。だから政策に現れるところを見ると、どうしても重慶を粗略し勝ちになる。先般、重慶使節熊式輝の一行が米國であまり好遇されず、その不滿をロンドンでぶちまけたなどはいゝ例である。カサブランカ會談でも重慶は忘れられてゐる。この冷淡振りを見てとつた重慶は、孔祥熙や蔣夢麟などが先頭にたつて熾んに日本の長期戰態勢の完成をはやしたてゝ、日本を後廻しにするとその間に日本は完全に立直つてしまふぞと囁しにかゝつた譯である。特に彼等が力をいれたのは日本の生産力の增强である。而して、日本の生産力をチエックするものは大陸よりする日本工場爆擊より外に方法はないではないか、といふのである。然し、この我田引水の日本本土爆擊論は見事にヒットした。

四

この原因には二つある。一つは歐洲作戰が時間的にも、勞力的にも、物質的にも、仲々容易でないことが分つたこと。この二つの理由から支那大陸を反樞軸から喪ふことの重大性を今更に痛感したといふ次第である。さてこそ、宋美齡を米國議會で演說させたり、印度のカルカッタ會談、その他の軍事會談に重慶を加へたり、ノックスが盛んに日本擊滅を放送したりする腹の底も見えるといふもの。圖に乘つた重慶は、印度問題に容喙したり、米英對ソ聯の調停に奔走したり、こゝのところ少しく有卦に入つた形である。

ところで現實の重慶援助はどうか、といふとこれが必ずしも期待通りにいかないといふのが眞相である。何しろ飛行機に飛行士までつけて、ガソリン持參といふのであるから米國の重慶援助も並大抵ではない。然も二百や三百の飛行機を送つて見たところで、大陸には强力な日本軍がゐるとすれば、今のところ燒石に水といふより外にはない。けれども、さうして置かないことには重慶が承知しないし、重慶も心理的にやりきれないのである。

五

以上のやうな關係から、米ソ、米重慶の關係はかなり接近して來てゐることは想察出來る。

さうなると、反樞軸陣營に於ける英國の立場は甚だ寂然たるものにならざるを得ない。併も、濠洲、ニウジランドは全く米國の實力下にあり、西亞にまで米軍が入りこんで來た現在となつては、米國の參戰出兵に躍起となつた英國が庇を貸して母屋までの感なきを得なくなるのは當然であらう。その上歐洲の情勢も昔日とは一寸樣子が變つて、今ではさうアメリカの力を必要としなくなつて來た。獨ソ共に倒れるなら米國の應援などは無い方がいゝといふのが英國の打劃つた腹なのである。そこで、今度は方向を變へて南米あたりに英國の根據地を殘して置かうとかかつたのが例のアルゼンチン工作である。

斯くて、反樞軸國内に於ける米英の相反せる心理的動きはやゝ表面化の傾向を辿つてゐる。然しこの傾向も、獨逸の豫想外の退却が最大の原因であつて、若しも獨逸が再び力を恢復して來ればまた自ら情勢が變つて來るであらう。孰れにしても、ハリコフ、ロストフ陷落後に表れた反樞軸陣營の同寐異夢の傾向は、反樞軸結束の本質を曝露したものとして注目に値ひする。思想戰、宣傳戰、といふやうなものもかゝる國際關係の機微に觸れ、情勢に對應して初めて効果をあげ得るであらう。

☆☆ 戰費は諸君の懷の中にある
☆☆ 進め一億戰場へ
☆☆ 生産增强は最後の勝利
☆☆ 一點の衣一椀の粥すべてが國力である
すべてを戰爭へ

刑政第56巻第4号
矯正図書館

東京通信

待望の東京都制案は二月二十七日衆議院を通過、既に貴族院での可決を待つのみとなつた。茫々たる武藏野の古へはいざ知らず、太田道灌の築城を契機に德川幕府三百年の大江戸として鐘一つ覺れぬ日とてはない絢爛たる文化を誇り、明治維新と共に東京と改稱され、爾くも御遷都を仰いで以來明治、大正、昭和と輝かしい發展を遂げて來た東京市は大東亞戰爭のさなか今また「東京都」として飛躍發展する確固たる態勢を固め文字通り大東亞の盟主日本の首都としての威容を整へることになつた。「擧ちてし止まむ」の民一億の合言葉に魁け東京人の決意は既に固いものがあらう。

第三十八回の陸軍記念日を前に數々の記念行事が既に華々しく發表されてゐる。曰く大東亞戰爭完遂大演奏會、日露戰役從軍勇士感謝犒勞大會、米英擊滅戰場脩神昂揚座談會等、其の他映畫、演劇講演に或は街頭の繪畫移動展、廣告窓飾に大東京の「擧ちてし止まむ」進軍は櫻待つ春と共に目覺しい躍動が約束されてゐる。斯うした華々しい躍動の陰に私は街の或洋品店の轉業挨拶に以下のやうなものを見た。

「今般國ノ要請ニ依リ轉廢業仕候
決戰第二年ヲ迎ヘ光輝アル三千年ノ歷史ト國運ヲ賭シテ此大東亞戰爭ヲ戰ヒ抜ク爲一億民草ハ其ノ總力ヲ結集シテ必勝體制確立ヲ目指ス秋、我等商業者モ亦「企業整備」ヲ通シテ微カ皇恩ノ萬分ノ一ニ報ヒ奉ルコトヲ得ルノ光榮ニ浴シ得マスコト誠ニ之ニ過クル欣ヒハ御座イマセン。皇國日本カ國ヲ擧ケテ生産ニ躍進セントスルトキ國民トシテノ私モ亦小店ノ小サキ歷史ト經驗ヲ捨テテ敢然生産部門ノ誇リニ生クヘク此處ニ閉店轉業ヲ決意シタ次第テ御座イマス。顧ミマスレハ永年ニ亘ル皆々樣ノ絶大ナル御後援ト御指導ニ依リ今日迄大過ナク配給ノ任務ニ從事サセテ戴キマシタ御厚恩今更ノ如ク痛感致サレ感激ヲ以テ深謝致ス次第テ御座イマス。
何卒今後共宜シク御指導御鞭撻ノ程御願ヒ致シマス。尙整備後ハ配給ノ完璧ヲ期シテ雄々シク殘留スル兄弟達ニ依テ御需要ニ應スルコトニナツテキマスノテ何卒御安心ノ程ヲ願上ケマス。
店主」

最後に萬葉の一首を添へて結んである。

「御民われ生ける驗あり天地の榮ゆるときにあへらくおもへは」

轉廢業中小商工業者の心意氣でもあらうか。

今の世の中には正直にすれば損をすると云ふ一群が存在する。そんな世の中にする政治が悪いと答へる人もある。兩者の非を摘示して提言說をなす人もある。國恩と名利が深く對立するとき忠臣は初めて忠臣としての本領を發揮し鐵の如き勇猛心と神の如き叡智を表す。今日の生活にはこの心掛が必要である」と。私はこの種の說をなさない默々として命之順ふてゐる最も多くの人々に無限の美しさを感じてゐる。（てつ）



「己が子を惠む心を（顧言の訂）範とせば學ばずとても道に到らん」で古來世界に冠たる吾國の家族制度の淳風美俗は健全な家庭の中に完璧な教育行刑の理想を包擁して居る故に必しも高等の教育や文化に浴さなくとも圓滿な社會常識と不斷の研究と努力の心掛けがありさへすれば今猶大多數の監獄時代からの錬達の刑務官で結構時局下の新體制は實現可能の見込が充分にある。要は今後に於ける此等の刑務官の指導如何にかかつて來るのではあるまいか。一例を擧げるならば戒護や作業用度等の各課が職域の範圍や權限に於いて鎬を削り御互が迷惑し合ふことは過去に於いて往々あつたが刑務官同志の內抗は不知不識の中に受刑者に對して行刑の威信を落し致命的な悪影響を教育行刑の上に招致することを覺えなくてはならぬ。今猶全國の刑務所に跡を斷たざる如きかゝる事態は不知不識の中に多年に渉つて戒護の方面より事務方面に優秀な刑務官を拔擢した習慣が齎したものではないであらうか。

（函館——今村次郎）

——道を樂んで職に盡した——

ゼーバッハ氏

大石武

數年前、刑務協會五十周年記念祝典のあつた日のことである。私は當日特に來臨を辱ふした清浦伯を案內して、刑務協會の樓上に設けられた行刑記念品展覽會室に入つた。伯は興深げに一々觀て行かれたが、偶々壁間に揭げられてあつたゼーバッハ氏の肖像の前に差しかゝるや丁寧に脫帽して一禮を施された。私はそれを見て、二つの敬虔な心持に觸れたやうに思つた。二つの敬虔な心持といふのは、禮を施すものゝそれと。禮を施されたものゝかつて有つてゐたであらうそれとである。禮を施すといふことは、或は伯としては故人の肖像に對してひとしなみに有つ心持かもしれないが、しかしながらあの場合、對象がゼーバッハ氏であるだけに特にさうであつたといふ風に私は解釋したい。恐らく伯は、當時ゆくりなくもゼーバッハ氏の肖像を發見されて、往事を憶ひ起されたことであらう。往事——今から五十有餘年以前のことである。茫々五十有餘年。當時と今日とでは、我國行刑の事情も天地霄壤の差であらうが、その差の第一步を踏み起す動因を與へたものが實に清浦伯とゼーバッハ氏とであつたのである。それ故に、清浦伯のことを語れば、どうしてもゼーバッハ氏のことに語り及ばなければならない。にも拘らず、今日ゼーバッハ氏のことを語るべく、餘りにも資料が乏しい。現在生存してゐられる行刑界の故老の中で、ゼーバッハ氏を直接見知つてゐられる人は、僅かに一二を數ふるにすぎまいと思ふ。それ等の人たちの印象を訊いて廻ればいゝのだが、さうした遑もないので、私は、ゼーバッハ氏のことに關し小河滋次郎氏が書き殘された僅かな資料と故藤澤正啓翁からかつて聽いた斷片的の話との中から、こゝに一つゼーバッハ氏の映像を作り上げて見ようと思ふ。

ゼーバッハ氏は我が政府の招聘に依り內務省獄務顧問兼監獄官練習所講師として、明治二十二年十一月初旬我國に來朝した。當時の山縣內相が、獨逸訪問の際その契約を取り極めて來たのだといふことであるが、勿論これには清浦伯が參劃してゐる。或は最初我政府としては、當時獨逸で名典獄の譽れ高かつたクローネー氏を嘱望したのであつたが、同氏は老齡の故を以てこれを辭し、代りに自己の弟子の中から、「學理に詳しく實務に通じ」てゐるゼーバッハ氏を選んで推薦して來たのだともいはれる。何れにしても獄務顧問としてゼーバッハ氏を得たことは當時の我國の行刑にとつては祝福さるべきことであつた。それは我國が警務顧問としてかのヘーン氏を得たやうなものであつた。或はそれ以上のものであつたかもしれない。ヘーン氏は我國に約六ケ年間も滯在してゐたが、ゼーバッハ氏の來朝後一ケ年半にして歸國した。ヘーン氏は警務にゼーバッハ氏は獄務にといふやうに、文物制度、恰も脫皮期に在つた當時の日本が、この二人の外人顧問に負ふところは頗る大きい。日本はかくして感謝を以て一人を送り、希望を以て一人を迎へたのであつた。

一

警務にしても獄務にしてもすべて改革といふことが、當時の我國に課せられた命題であつた。舊衣を脫して新衣をまとふ——この時代裝のために當局は苦心した。我國の當局がヘーン氏に期待したところもそれであつたし、ゼーバッハ氏に期待するところもそれであつた。責任感の強いゼーバッハ氏は、來朝後、非常な勉強で、東京府下及び近縣の各監獄を觀察して廻り、直にこれが復命書を作成して內務省へ提出してゐる。觀察が肯綮に中つてゐて、意見の適切なことには、我が內務

刑政第56巻第4号
矯正図書館

當局も一驚を吃した程である。元來ゼーバッハ氏は、當時小河滋次郎氏（同氏は內務屬として當時ゼーバッハ氏の隨員兼通譯の如き仕事をしてゐた）に對し「予は貴國に來朝して親しく府下の各監獄を實見するまでは、日本の監獄。少くも帝都たる東京の監獄はすべて分房制によつて刑を執行せられゐることなりと信じゐたり。斯くいはゞ、已れの從事する仕事に對して甚だ迂濶なりしかの如くなれども、予は實に之を貴國の事情に通曉せりと稱する本國の知友に聽き、且つ予の最も信憑する或る監獄書（千八百八十八年刊行のホルツェンドルフ氏著獄務要書）に就て之を知り、殊に政治上及び學問上長足の進歩を以て有名なる貴國のとなれば、予は一も二もなく之を確信し、毫も其間に疑念を挾むところあらざりしなり」と自ら告白してゐるやうに。當然のことではあるが、當時の我國の監獄事情に對する氏の智識は殆んど皆無といつてもよかつたのである。それだけに氏は一度我國の各監獄を實地に觀察するや「忽ち予の心中に二樣の觀念を起せり、曰く懺悔、曰く悲哀これなり、何をか懺悔といふ、曰く予の人言を輕信せしことを悔ゆるなり、何をか悲哀といふ、曰く、東洋に冠たる著名なる、日本帝國、而も萬國地圖の上に其の名を知られたる大都東京に於てすら未だ分房制を實行するに至らざることこれなり」と、實に意外の感を禁じ得なかつたものゝやうである。「世界地圖の上に其の名を知られたる大都東京」の各監獄にしてかくの如しとせば、他は推して知るべしであらう。氏が一時「悲哀」を感じたのも決して無理ではなかつた。だが、さうした監獄であればこそ「改革」が必要なのである。「監獄を見ればその國の文化の程度が判る」とさへいはれてゐた時代のことである。維新草創の際、獄制のことはとかく後廻しとなつてゐた日本ではあつたが、條約改正に備ふる意味もあつて、鋭意これが改革を企圖してゐた當時の我內務當局としては自然、ゼーバッハ氏の貢獻に待つところ大であつたわけである。ゼーバッハ氏は、よくその寄托に背かなかつた。一旦は「悲哀」を感じた氏ではあつたが、直に起ち直り「予は之れが爲めに敢て失望せざるなり、當に失望せざるのみならず、或は自ら揣らざるの誹りあるべきも、予は之れが爲めに却つて已れの拔倆を用ゆるの多きを喜ぶものなり」と、斷乎たる決意と意氣とを以て、その使命の遂行に邁進せんことを誓つたのである。

二

我國の獄制改革に對するゼーバッハ氏の設計は、第一に獄務の統一、第二に監獄費の國庫支辨、第三に分房制若くは階級制の實施、第四に、囚人に對する個人的處遇、そして最後に作業に對する觀念の是正、と大體この五つのことが中心となつてゐたらしく考へられる。一口にいへば、ゼーバッハ氏は、祖國獨逸の監獄制度をモデルとして、我國のそれを改革しようとしたのである。氏は機會ある毎にその意見を披瀝してゐるが、中でも氏が明治二十三年十月二十二日、華族會館に於て前後約三時間に亙つて試みた講演を讀むとよくその間の消息が窺へる。しかしながら一切のことがさうであるやうに、監獄制度も——否特に監獄制度は、運用にその人を得ることが何よりも必要である。監獄が改過遷善の道場である限り、監獄官吏には當然人の師たる資格が要求されなければならない。然るに當時の監獄官吏の大多數といふものは、さうした資格からは遙かに遠い人だちであつた。何がさて、監獄官吏を養成しなければならない」——ゼーバッハ氏が、招聘を受けて遙々來朝したのも一つは、內務當局のかうした意圖の下に於てゞあつたし、又ヘーン氏を事實上の指導者とする警察官練習所の好成績が先蹤をなして、ゼーバッハ氏來朝の翌年卽ち明治二十三年四月に我國最初の監獄官練習所が開設されたのもそのためであつた。この第一回監獄官練習所の期間は僅に二ヶ月に過ぎなかつたが、相當の成績を擧げてゐる。清滿伯のいはゆる「上よりして下に及ぼす」の主旨にに則つて、全國各監獄の幹部級のものを選拔して一應の教育を施したのであつたが。これにはゼーバッハ氏が大きな役割を働いてゐる。氏はこの講習で獨逸監獄法の講述を受持つてゐたが實地の訓練と合せて囘を重ぬること三十七囘、外に獄務質疑會といふものを前後二十五囘に亙り行つてゐる。一御傭外人講師としては異常な勉强振りといはなければなるまい。次で第二囘監獄官練習所が、同年十月二十日から翌明治二十四年三月三十一日まで六ケ月間に亙つて開設されたが、ゼーバッハ氏の受持は、第一囘の場合と同樣であつた。赤坂葵町の寓

居から練習所の設置されてゐた小菅集治監まで約五六里の道程を人力車に搖られながら通つたのである。しかも氏の出勤時間の正確なことは無類で、殆んど一分として遲刻したことはなかつたといふ。かうした些細な點にも氏は常に弟子だちに範を垂れようとする用意を忘れなかつたのである。日本政府の寄托に背くまいとする堅き決意を眉宇の間に漲らせて、自ら鞭ちつゝ多くの弟子だちを身を以て導いて行く當時のゼーバッハ氏の風貌を偲ぶとき、私共にも自ら敬虔の念が湧いて來る。

第二囘監獄官練習所卒業式の際ゼーバッハ氏は、巢立ち行く卒業生に對し、

この練習中に諸君が御學びになつた事柄をこれから御實行にならうといふのには必ずや衝突もあることでございませう。諸君がこれから御實行にならうとすることは一つの改良の事業でございます。凡そ改良の事業には多少の困難の伴ふことは當然でありまして諸君は、その困難に打ち克つて進むだけの勇氣を有たなければならぬのであります。

といつてゐる。「困難に打ち克つだけの勇氣を有て！」——ゼーバッハ氏が希望をかけたその多くの弟子たちへ贈けとして贈つた最後の言葉がこれであつた。凡そ一切の改革の鍵は畢竟するに「勇氣」である。かくて學理と智識とをその師から學び取つた弟子だちは、その學理と智識との最後の仕上げとして親愛なるその師から贈られたこの贈けの言葉を腦裡に疊み込みながら、夫々歸任の途に就いたのであつたが、しかしこの贈けの言葉がその師から聽く最後の言葉にならうとは、當時何人も豫想しなかつたであらう。

三

明治二十四年十月には、第三囘監獄官練習所が開設される豫定になつてゐた。ゼーバッハ氏の聘傭契約は三ヶ年であつたから、從つて練習所の方もこの第三囘を以て一先づ中止される筈になつてゐた。ゼーバッハ氏は翌月から氏に再び多忙な日が始まるであらうことを思ふて、橫濱の獨逸海軍病院の一室で病苦を推しながら、頻りにその構想を練つてゐた。同年九月中旬のことである。氏は同年六月北海道の視察旅行を終へて歸京するや、腎臟炎に罹され、ベルツ博士の勸告で箱根宮ノ下に轉地療養してゐたのであるが、歸京後症狀が思はしくなかつたので、改めて橫濱獨逸海軍病院に入院したのであつた。面會謝絕であつたが、小河氏その他極く近親のものだけは別で、談偶々獄事に及ぶや、ゼーバッハ氏は恰も病ひの身に在るを忘れたものゝやうに、語調が自ら昂まつて來るのであつた。病ひは持ち直すものとも見られてゐたが、天命如何ともしがたく、九月二十一日午後三時、氏はつひに溘焉として永眠した。享年三十二であつた。死の床にかけつけ小河氏は、師の骸に取りすがつて慟哭した。しかしながら「予輩は今恰も盲人の杖を失ひ、暗夜に燈を亡ひたるが如き心地するなり」といふのは、ひとり小河氏のみの悲叫ではなかつたのであらう。

ゼーバッハ氏の死は、一時我國の行刑界を暗くした。小河氏が「暗夜に燈を亡ひたるが如き心地するなり」と長嘆したのも決して唯の形容語ではなかつた。若し當時、蕪雜幼稚なる我國の行刑界が、道案內者指導者として仰ぐべき人を求めてゐたとすれば、又事實求めてゐたのであるが——ゼーバッハ氏の如きは、たしかにその最適格者の一人であつた。貴族出身である氏は、先づ貴族にふさわしい人格の所有者であつた。軍人であつた氏は又、軍人にふさわしく、責任觀念が强く、身を持すること頗る嚴であつた。と同時に人を待つに寬容と愛情とに吝かでなかつたことは、行刑官としての氏の一つの强味でなければならない。この意味でゼーバッハ氏は、殆んど理想的、模範的の行刑人——否、「人」であつた。氏の葬儀の日、牧師シュミーデル氏はその弔辭の中で「ゼーバッハ氏の生涯は世人の模範たるに足る」と述べてゐるが、正にその通りであらう。氏は行刑人以上の行刑人として、行刑人の比較的高く評價されてゐる獨逸に在つてすら、その最も高く評價されてゐた一人であつたらしいのであるが、それだけに當時、日本の弟子だちが、この偉大なる師から學んだものは決して獄務に關する學理や智識に限つたことではなく、むしろそれ以上のものを多く學んだのであつた。氏の訃音が全國の監獄官を泣かしめ、氏の棺が橫濱獨逸海軍病院から同港外國人墓地へ葬送されるとき、數百の會葬者がこれに續き、そして故師への追弔金が優に千數百圓を算するに至つたといふのも決して偶然ではないのである。

ベルツ博士のいふところによるとゼー

刑政第56巻第4号
矯正図書館

バッハ氏が病ひを獲たのは、劇務のためだといふことである。實際來朝以來、ゼーバッハ氏の勉強振りは大したもので、監獄視察で氏が足跡を印しないのは九州だけであり、しかもこれが復命書を前後三回も作成してゐる。その他、内務省へは毎日出仕するし、監獄官練習所の開設されてゐるときは殆んどその方へ附ききりであつた。「男子須らく公事に斃るべし、身を獄事に委ぬるもの殊に此決心勇氣なかるべからず」とは、氏が小河氏を激勵した言葉だといふが、恐らくこれは、氏が氏自らに加へてゐた嚴しい鞭の音ではなかつたのか。氏が箱根宮ノ下に病ひを養つてゐるとき、偶々その師を見舞つた小河氏が「見知らぬ異鄉で病氣にかゝられては嘸かし心細く感ぜられることでせう」と慇懃の言葉を述べると、氏は忽ちこれを否定して「何の〳〵、道を樂んで職に盡すの身には到る處これわが故鄉であり、觸目するところみなわが知己です。君のいふやうな、そんな心細いなどいふことは、決してありませんー」と答へたといふ。こゝまで來れば

もう達人の境地である。公事に徹し職務に忠實であるといふ氏の持前が氏の人格をしてこの高い境地にまで昇華せしめたものであるとすれば、氏の心事も亦仰ぐべきかなであつて、我國に於ける氏の多くの弟子だちが大なり、小なり、氏の分身として、その師の肖像を自己の職場に掲げ朝夕これを仰ぎ、見てゐたといふのも、當然の至情であらう。

ゼーバッハ氏は、千八百五十九年九月十九日、獨逸チュリンゲン州の居碧に生れた。氏は六人兄弟の中の第三子であつた。良い家柄で良い家訓の下に順調に育つてゐたが、十一歳の時に氏は父を失つた。父は、軍人として普佛戰爭の際に戰死したのであつた。主人を失ふと同時に氏の家では一家を擧げてベルリンに移り住んだが、氏はそこで後陸軍士官學校に入學した。父も軍人であり、長兄も軍人であつたので、氏も亦軍人として身を立てようとしたのであつた。淑德の聞え高かつた氏の母は、氏を良き軍人に仕立上げようと、愛故の嚴しさで氏を激勵した。氏も亦それに應へて、殆んど寢食を忘れて勉強した。拔群の成績で士官學校を卒業するや、氏は直に母校の敎官として採用された。擔任は、氏には最も適任であらうと思はれる外國留學生の指導訓育といふ仕事であつた。外國留學生の中でも、特に土耳古の留學生が多かつたので、同國の兵制改革上には主として氏の意見が採用された。土耳古皇帝は大に氏を德とし、氏に對しオスマニア第四勳章を贈與した。だが、繁劇な軍務を續けて行くがためには、氏の健康がこれを許さなかつたので、氏は間もなく軍職を退いた。軍職は退いたが、しかし社會は、有爲の材である氏を、いつまで閑地に置かなかつた。かくて氏は新に行刑界の人となり、モアビツト監獄の上等監獄官に任ぜられた。蓋し氏は、監獄の改善を以て自己の天職と認め、慨然としてその任に就いたのであつた。在勤六年、クローネー老典獄の寵兒として、その名漸く斯界に高からんとしつゝあつた際、偶々我が山縣内相の招聘に應じ來朝するこ

とゝなつたのである。來朝する氏を日本で待つてゐたものは、本國以上に更に〳〵改革を要すべき嚮式の獄制とその官吏の頭腦とであつた。そしてこれが改革に自己の使命を見出した氏は、全身全靈を打ち込んでその仕事に邁進したのである。死の少し前、監獄費國庫支辨案の議會提出が廟議で決定されたことを病床で聞くや、思はず喜色滿面、手を打つて快哉を叫んだ氏ではあつたが、しかしこれが氏の生命を以て購ひ取つたものであるといふことは、氏もさすがに氣附かなかつたのである。

葬儀の當日、小松原英太郎氏は、警保局長の資格を以て特に獨逸總領事を訪問し、ゼーバッハ氏の長逝に對し手厚い弔意を述べたが、その時小松原氏はユゼーバッハ先生は亡くなられてもその偉勳は長く我が監獄史の上に殘るでせう」といつたといふ。書かれたる監獄史以上に、書かれざる監獄史―その流風、餘韻こそは、仰ぐべく讃ふべきかなであらう。

「監獄費國庫支辨」問題の頃（三）

島　正雄

○政府委員（大久保利武君）前會ノトキニ主管問題ニ付テ御質問ガゴザイマシタガ、此事ニ付キマシテ、ソレ〳〵手續ヲ盡シマシテゴザイマスガ、何分政府ニ於キマシテハ監獄ノ主管ヲ今ドコニ屬スルト云フコトヲ極メル理由ハ今日デハマダハツキリシテ居リマセヌデ、矢張リ今度監獄費國庫支辨法案ヲ出シマス際ニハ内務省デ監獄ノ主管ハヤル計畫デ出テ居リマスノデゴザイマス、唯今ノ所デハ別ニ内務省デ主管ヲシテ居リマシテ非常ニ差支ヘルト云フ理由ハマダ政府ニ於イテハ見出シテ居リマセヌデゴザイマシテ、先ヅ今日ノ所デハ矢張リ是マデ通ニ内務省デ主管スルコトニナツテ居リマス、サリナガラ此問題ハ餘程重大ナ問題デゴザイマスカラシテ、何レ此監獄費國庫支辨法案ガ幸ニシテ通過シマシタ曉ニハ内務省デハイカヌ他ノ省ニ主管換デモセヌトイカヌト云フ理由ヲ見出シマシタ曉ニハ又ソレ〳〵ノ手續モ盡シマスルデゴザイマセウガ、今日ノ所デハ矢張リ内務省デ主管ヲヤツテ行ク積リデゴザイマス。

○三好退藏君　唯今ノ御答デ見マスルト矢張リ是マデノ通リ内務省主管デ監獄ノコトハ總テ御管轄ニナルト云フコトデアリマスレバ其機關ハドウ云フ風ニ御設ケニナルノデアリマスカ、是マデハ地方官即チ府縣知事ニ監獄ノコトハ專ラ監督サセテアツタノデアリマセウガ、國庫支辨ニナルト同時ニ内務ニ直轄サセルコトニナルノデアラウト想像スルノデアリマスガ、サウシマスルト地方監獄所謂府縣監獄ノ事務ヲ管理シテ行ク所ノ官吏ハ内務省ノ官吏ヲ以テ之ヲ取扱ハセラレルコトニナリマスカ、ドウ云フ組織デ此監獄事務ヲ監督主宰サセルコトニナリマスカ、其邊ノコトヲ伺ヒタウゴザイマス。

○政府委員（大久保利武君）其事ハ委シイコトハ唯今カラシテ御答出來兼ネマスルガ、併シ大體ノ事ニ付テハ一應御答致シタイト云フ考デゴザイマスガ、畢竟監獄費國庫支辨法案ノ出マシタノモ地方經濟デ是マデ通リヤツテ居リマシタラバ獄舍ノ改造トカ色々經費ノ何ガ……地方ノ行政事務ガ非常ニ多クナツテ、經濟モ餘程困難ニナツテ來ルカラ、是非之ヲ國庫ニ移サナケレバナラヌト云フ理由モゴザイマシタガ、第一政府デハ監獄ノ何ヲバ嚴ニシテ、監獄事務ノ統一ヲ計ルト云フノガ第一ノ主眼ニナツテ居リマスルノデゴザイマスカラ、統一ヲ圖ルト云フ點カラ致シマスルト云フトハ是マデ通リ府縣ノ地方官ノ手ニ任シテ置キマシテハ到底區々ニナツテ監獄ノコトニ經驗ノ無イ人ナドガ之ヲ監督シテ一時巡察ヲシテ調ベマシテモ中々其監督ノ何ガ行屆クコトノ出來ヌノハ是マデノ事實ニ依ツテモ明ナコトデゴザイマシテドウシテモ統一ヲ計ルニ付テハ之ヲ中央政府デ之ヲ直轄致シマシテ行政事務ノ統一ヲ計リ時々中央政府カラシテ巡察ヲ致シマシテ之ヲ監督ヲスルト云フコトガ必要ト認メテ居リマスノデゴザイマス、國庫支辨法トナリマシタナラバ其邊ノコトニ付テ取調ヲシマシテ是非直轄スルト云フコトモ今カラ公言シテ置イテモ宜カラウト考ヘテ居リマス、併シ詳細ノ事ニナリマシテハ何レ官制デ極リマスデゴザイマセウカラ、今カラシテ委シク申上ゲラレマセヌガ、地方官ノ手ヲ離レテ監獄行政事務ト云フモノハ中央政府デ直轄スルト云フコトハ、ドウシテモ行フ積リテゴザイマス。

○三好退藏君　尚ホ御尋シマスガ、中央ニ直轄ヲナサツテ、サウシテ監獄事務ヲ監督主宰シテ往カレルニ付テ此人員デ十分御間ニ合フ御考デアリマスカ、又其機關ノ組織ノ上ニ付テハ別ニ今日新タナル御設ケハ無クテ濟ムノデアリマスカ、ソレニ付テハ費用ノ點ニ付テモ現在ノ儘デ別ニ增額ハナクテモ宜シイト云フ御考ヘデアリマスカ、ソレヲ伺ヒタイ。

○政府委員（大久保利武君）御答致シマスガ、此吏員ノ數ナドハ先ヅ是デ增サヌ積リデ地方經濟デヤツテ居マシタ儘ノ機關デ、吏員ノ數デ、國庫ニソレヲ引受ケマシテ直轄ニシテ

矯正図書館

此儘デヤツテ行ク積リデアリマス、但シ此看守ノ定員デアリマストカ其他ノ吏員ノ數ト云フモノハ囚人ノ數ニ應ジテ、是ハ增減スルモノデゴザイマシテ、是ハ勅令デ標準ガ極メテゴザイマシテ囚人五百人ニ付テ看守七十五人ト云フヤウナ標準ガ決ツテ居リマスノデアリマスカラ、囚人ノ增減ニ依ツテ自カラ吏員ノ數ハ增減ヲ來シマスケレドモ、併シ先ヅ三十三年度ノ豫定囚人ノ數カラシテ、サウ酷イ增減モ無カラウト云フ積リデ居リマス。

○三好退藏君　モウ一ツ御尋シマスノハ下級吏員デナクシテ所謂高等官ニ屬スル所ノ吏員デアリマスガ、內務省ノ監獄局カラ直チニ各府縣ノ監獄ヲ直轄スルコトニナツテモ其間ノ機關ハ別ニ御設ケナサラヌ、高等官ノ部分ニ付テハ組織ハ增サナイト云フ御考デアリマスカ。

○政府委員（大久保利武君）地方ノ典獄ナドニ於キマシテハ別ニ增サヌ積リデアリマス增スヨリモ寧ロ……

○三好退藏君　イヤ典獄ヂヤナイ、典獄ヲ內務省デ直轄ナサルニ付テノ……

○政府委員（大久保利武君）ハイ、ソレニ付テハ此法案ガ通過以シマスレバ何レ追加豫算ヲ提出スル積リデアリマスガ、內務省ノ監獄局デハ多少ノ高等官判任官ハ增ス積リデゴザイマス、ト云フノガ、ドウシテモ中央政府デ地方監獄ヲ直轄スルコトニナリマスト監督ノ必要上ヨリ巡閱官ト云フモノハ、ドウシテモ置カヌトイカヌ、始終地方ニ巡閱官ヲ出張サセマシテ事務ノ成績ヲ調ベテ監督スル等ノ必要ガアリマスカラ巡閱官ヲ……巡閱ヲヤラセル爲ニ高等官數名ヲ增シマシテ從ツテ判任官ト云フモノヲ若干名增ス積リデアリマスレバ、ソレハ何レ追加豫算デ出ス積リデアリマス。

○說明員（小河滋二郎君）チヨツト私ハ御參考ニ申シマスガ、今ノ御尋ノ建築ノ費用デゴザリマスルガ、最近ニ造リマシタノハ愛知縣デゴザリマス、此愛知縣トカ、ソレカラ東京ノ巢鴨ノ監獄、ソレカラ神奈川縣橫濱ノ監獄ト、コレダケガ近年ニナツテ造リマシタ、愛知縣ハタシカ三十六萬圓クラキデゴザリマス。

○政府委員（大久保利武君）愛知縣ノ監獄ハ二十七年度カラ三十二年マデ涉ツテ居ル建築費テ、ソレガ二十萬三千八百五十圓餘デゴザイマス、神奈川縣ガ二十九年度カラ三十年度ニ涉ツテ居ル繼續建築費ガ十萬九千三百二十三圓餘、ソレカラ神奈川縣ガ二十五年度カラ三十一年度ニ涉リマシテ、是ガ二十一萬九千九百二十一圓餘ニナツテ居ル、ソレカラ巢鴨ノ監獄ハ二十二年度カラ二十六年度ニ涉リマシテ四十一萬三千四十一圓……

總額デス、巢鴨ノ監獄ハ御承知ノ通リ煉瓦デ出來テ居リマスカラシテ、非常ニ高イ額ノ金ニナツテ居リマス、先ヅ重立ツタ何ハ……建築ハ其位ノモノデゴザリマシテ、他ハ皆小修繕トカ小改築デアツテ、唯今申上ゲタノハ重立ツタ新築ノ費用デゴザイマス。

○子爵鍋島直彬君　唯今私ガ後ニ申シタ疑點ニ付テノ御答ヲ願ヒタイノハ先刻モ申シタ通リ確實ノ目的ヲ達スルト云フノガ趣意デアツテ差向棄置キ難イト云フ程ノ酷イ監獄ガ二十四箇所モアル、ソレヲ二十年モ掛ツテ居ツテハ二十年ノ後ニアラザレバ確實ノ實際ノ仕事ハ出來ヌト云フコトニハナリマセヌカ、ソレハ已ムヲ得ヌト云フ御積リデアリマスカ、此國庫支辨トナツテ大ニ面目ヲ改メナケレバ其効能ハ無イ譯デアル、大ニ面目ヲ改メムト欲セバ二十年ノガハモット短クセネバナラヌト云フ程ノ必要ガアリハセマイカト思ヒマス、ソレヲ一ツ……

○政府委員（大久保利武君）先ヅ完全ナコトニ致シマスレバ、ドウシテモ監獄改良ト云フコトニハ監獄ノ獄舍ガ相當ナ準備ガ出來テ居フヌト改良モムツカシイ話デゴザイマスガ、ト云ツテ監獄ノ獰舍バカリ綺麗ニ出來テ居リマシテモ、其監獄事務ニ從事致シマスル行政官吏ト云フモノハ是ハ餘程修練ヲ要シテ事務ニ獻身的ニ、其事務ニ一身ヲ犧牲ニ供スルト云フヤウナ人デナイト、ドウモ出來ヌ事業デゴザイマシテ、先ヅ監獄改良ト云フモノハ一面ニハ獄舍ノ改良ト云フコトハゴザリマスケレドモ、之ニ從事致シマスル吏員ノ改良ト云フコトモ等シク非常ニ大切ナコトニナツテ居リマスカラシテ滿足ヲスルヤウナ十分ナコトヲナシマスレバ獄舍モ改築ニナルシ、ソレカラ行政官吏モ十分ナ教育實驗ヲ備ヘタイト云フノガ、……十分ヲ申セバ希望スル所デゴザイマスケレドモ、何シロ監獄ノ改築ト云フコトニハ非常ニ金ヲ要シマスルナンデゴザイマスルカラシテ、先ヅ不十分ナガラ獄舍ノ改築ト云フコトハ永年ノコトデアリマス

ルケレドモ、順次方針ヲ極メ建築ノ標準ト云フモノヲ定メマシテ著々マアヤツテ往キマスルシ、又一面ニハ行政官吏ノ素養、教育經驗ト云フコトガ必要デゴザンスルカラシテ、其方ニ又力ヲ入レテヤリマス積リデ、現ニ警察監獄學校ト云フモノモ今年カラシテ開校ニナリマシテ行政官吏ノ養成ト云フコトニ努メテ居ルモノデゴザイマスカラシテ先ヅ出來ルダケノ範圍デ此監獄改良ト云フコトヲ謀ツテ往ク積リデゴザイマス。

○子爵鍋島直彬君　唯今モ政府委員ヨリ述ベラレマスル通リ監獄學校ト云フモノモ出來テ、看守其他此囚人ニ直接スル人モ養成シテ訓練ヲ加ヘテ十分ナル人ヲ當嵌メルト云フコトニナツテ來マシタラバ自ラ待遇モソレダケ厚クナラネバナラヌコトハ言ヲ俟タヌコトデアツテ、自然俸給モ從ツテ增サナケレバナヌト云フコトデアリマスカ。

○政府委員（大久保利武君）現今モ現在ノ看守長、監獄書記、看守ナドノ俸給デハ實ニ薄給デアツテ、モウ少シ增シテヤラヌト、ドウシテモヤレマセヌケレドモ、待遇モ良クスルニハ俸給デモ多クヤラヌト行ケマセヌケレドモ、是ハ官制ノ出來工合トカ或ハ俸給ノ外ニ待遇ハ種々ゴザイマシテ、下級官吏カラシテ追々進メテ往クコトモ長官ノ手心デ出來マスルシ、ソレカラ是マデハ典獄ナドモ各府縣デハ高等官ノ末席ニ位シテ居ツテ僅カ部長ト等シイヤウナ俸給デヤツテ居リマスケレドモ、ヤツテ居リマシタケレドモ……ドウシテモ縣廳ナドデハ監獄ノコトト云フト冷淡視サレテ、判任官ノ俸給額ト云フモノモ他ノ警察部トカ內務部トカ云フモノニ比シマスルト大變少ナクアツテ、萬事マア他ノ行政官カラ冷淡視サレテアツタ、所ニ依リマスト云フト、地方長官ハ一年ニ極リノ巡閱ヲシナイ、世間ノ人ニモ非常ニ冷淡視サレテ、監獄ト云フト忌ミ嫌フ風ガゴザイマシタケレドモ、幸ニ近年官民ノ唱道ニ依リマシテ、監獄改良ト云フコトハ餘程世人ノ注目ヲ惹ク樣ニナリマシテ、監獄改良ト云フコトガマア大變ヤカマシク、ドウシテモ改良ヲヤラナケレバナラヌト云フコトニナリマシタシ、自然ニ監獄官吏ニ對スル受ケモ善クナルシ、從ツテ其監獄ノ事務モ獻身的ニヤラウト云フ人モ追々出來テ來ル、ソレデ滿足ヲ申シマスレバ俸給ハ是非上ゲテヤラナケレバ行キマセヌケレドモ、先ヅ此儘デ俸給ヲ暫時据エテ置イテ、ソレカラマアドウシテモ俸給ヲ增サナケレバナラヌト云フコトデゴザイマスレバ監獄ノ收入デモ殖ヤスヤウニ、努メマシテ、サウシテ監獄費ノ方ヲ少シ殖ヤシテ俸給デモ增額シテヤルト云フ途デモ執レル考デゴザイマス、先ヅ差當リ此表ニ揭ゲテアリマスル吏員ノ俸給額デ以テ增額ハ無クテヤツテ往ク積リデゴザイマス。

○說明員（小河滋二郎君）チヨツト御參考ニ……實質ニ於キマシテハ集治監ノ費用ト地方監獄ノ費用トハ異ツテ居ラヌ、今百圓ト云フ三十年度ハ非常ニ增加致シマシタガ、二十七年度二十八年ノ數ハ六十圓トカ七十圓トカヲ昇降シテ居ルノデアリマス、サウ地方トノ一人當リ餘計差ハ無イ、ソレカラ集治監ニ於テ幾分カ餘計要スル費用ハ御承知ノ通リ集治監ハ皆囚人デアリマシテ、而モ作業ガ尤モ外役デアルトカ或ハ石炭掘リト云フ樣ナ强役ニ就テ居ル者デアル、ソレ故ニ地方監獄ナドハ食料ガ平均六合クラキデアリマス、集治監ニナリマスト八合ト云フ極端ノ食料ヲヤル殆ド全部ソレデアルト云フモ宜イ、其衣食費ハ地方監獄ヨリ餘計要スルノハ地方監獄ハ幼年モ居リ又婦人モ居リ又刑事被告人ノ仕事ニ就カヌ者ガアリマス、サウ云フ樣ニ雜用モ大變廉クテ、而モ亦集治監ニハ押送費ト云フモノヲ見積シテアリマス、北海道ニ押送スル費用ハ集治監ノ方ニ這入ツテ居リマス、地方監獄ノ方ニハ無イ、又大概集治監ノ所在地ハ三池デアルトカ宮城デアルトカ餘程邊鄙ナ樣ナ所ニアリマス爲ニ米麥ヲ買入レマスニ他ノ地方カラ見マスルト幾分カ昂イト云フ事情モアリマス、ソレカラ作業ノ資本デアリマスガ、大概地方監獄デアリマスト資本ハ別段備ヘテ置キマセヌデ、多クハ請負業デアリマスカラ殆ド資本ガ無クテ濟ム、所ガ集治監ニナリマスト資本ト云フモノガ會計法ニ依ツテ澤山ノ金ヲ固定ニ見積ツテ置カナケレバナラヌ、地方ノ方ハ多ク請負業デアリマスカラ、サウ云フ資本ヲ要サヌト云フヤウナ事情セアリマシテ詰リ實際ニ給與シテ居リ使ツテ居ル金ハ政府委員カラ御答ガアリマシタヤウナ工合ニ多少官吏ノ俸給ナドノ點ニ付テ、看守ナドノ俸給ノ點ニ付テ少シ平均額ガ上ツテ居リマスケレドモ囚人ノ直接ノ給與ナドハ別段相違ガ著シクナイ、殊ニ今申上ゲタ一番重モナル費用ノ增減ヲ來ス原因ト

矯正図書館

矯正図書館

云フモノハ地方監獄ニハ仕事ニ就カヌ者モアリ病人モ多イ・デアル。集治監ノ方ハ屈竟ナ强役ニ就テ居ル者ガ多イ爲ニ食料品ナドガ餘計ニ掛ルト云フ點ガ重モデアリマス。

○三好退藏君　私モ監獄費ノ國庫支辨ト云フコトハ無論希望スル所デアリマス、然ルニ內務省所管ノ政府委員ノ御答辯ニ付キマシテ何分本員ハ滿足スルコトガ出來ナイノデアル、ソレハ理由書ニ記載サレテ居ル通リ「監獄ノ統一及ビ改良ヲ圖ルカ爲、國庫ノ支辨ト爲スハ必要ヲ認メル」ト云フノガ大眼目ニナッテ、居リマシテ又我々ガ希望スル所モ此ノ點ニアルノデアリマス、サスレバ此ノ統一ヲ圖リ改良ヲ加ヘルニ付テノ計畫、政府ノ方針ニ關スル所ノコトハ最モ明瞭ニ最モ詳細ニ我々ハ承知シタイノデアル、所ガ追々御答辯ノ所ニ依ッテ見マスト、未ダ御見込ダケデアッテ、詳細ノ御計畫ニ付テ伺フコトガ出來ナイ、ソレカラ統一ヲ圖リ改良ヲ加ヘルニ付テハ無論費用ガ增加スベキモノデアラウト信ズルノデアル、然ルニ今日マデノ四百八十萬圓ト云フ金額ヲ以テ統一改良ヲ御擧ゲニナルト云フコトデアリ勿論其上ニ尙ホ御見込ノコトハ收入ヲ得ル點ニ付テアル樣ニ御答辯デアリマシタケレドモ、本員ニ於テハ滿足スルコトガ出來ナイノデアリマス。

○小原重哉君　私ハ此案ニ贊成スルト云フコトニ付キマシテハ聊カ存ジテ居ル所ノ歷史ヲ諸君ニ御聽ニ入レヤウト存ジマスガ、國庫支辨デアッタ監獄費ガ地方支辨トナリマシタノハ明治十三年四十八號デゴザイマスコトハ御存ジノ通ノコトデアリマス其國庫支辨ニナリマシタ其論ノ內閣デ起リマシタトキニハ御存ジノ通リ十年ノ西南役ノ後ヲ受ケテ財政困難ト云フコトデ其財政整理ノ爲ニ內閣ニ整理委員ト云フ者ガ出來マシテ卽チ大隈伯ガ參議デゴザイマシテ當時內閣ガ諸省ノ長官ト分離デゴザイマシテ松方伯ガ內務卿デアリマシテ松方伯ノ方へ向ケマシテ財政整理委員所ノ大隈サンヨリ府縣ノ土木費ヲ全廢シ監獄費モ亦擧ゲテ地方稅トスルト云フ間題ガ內務省ニ廻ッタノデアリマス、其頃自分モ聊カ與カッテ居マシタカラ屢々其ノ內閣ノ整理局ニモ內務卿ノ代人トシテ出タコトモゴザイマシタ、其整理局ノハ海外ノ例ヲ種々取調ガアッタ樣子デアリマス、內務卿トシテハ松方伯ガ何分是マデ國庫支辨デアッタモノヲ地方稅ニ移スト今日地方官ナドハ困難ヲ訴フル場合、又此土木費ヲ全廢シ監獄費マデ地方稅ノ支辨ト云フコトハ實ニ困難デアルト云ッテ內務卿トシテ御請ガ致シ難イト云フコトデ遂ニ勅令デアルカデ御請スルト云フコトニナリマシタ、其時ニ當ッテ國事犯ノ者ニ係ル在監卽チ在監者ノ費用マデ地方稅デ負擔セシムルト云フコトハ甚ダ不道理ト云フノカラ致シテ刑期ノ長短ニ拘ラズ西南事件ニ付テ九州ヨリ多クノ國事犯者ガ出タ刑期ノ短カキモ無論、國事犯ハ國庫ノ支辨十年以上ノ者ハ國庫支辨ニスルト云フコトヲ其分別ガ付キマシテ其他ノ分ハ地方稅支辨トスルト云フコトニナリマシタノデアリマス、其時ニ其內閣財政整理委員局卽チ委員長ノ大隈參議ヨリモ其國法ヲ以テ處分シタ末ノモノハ地方稅ヲ負擔ニセヨト云フコトハ成程調ベテ見タ所ガ不道理ダ、裁判費用ト等シイモノデアル、歐羅巴ノ大國ニハ大分其國庫デソレ等ノ分別モ付テ行クドウモ地方稅ト云フコトハ不道理ダカラ三年經テバ財政ノ整理モ付ク見込モアルノデアルカラ、ソレハ能ク地方官ヘモ內諭シテ三年ノ間辛抱サセテ吳レト云フヤウナコトニ段々照會ガ付テ地方稅ト云フコトニナリマシタ、右樣ナ歷史モアルノデゴザイマスカラ私ナドハ經費ノ出所サヘアレバ國庫支辨デナケレバナラナイト存ジテ先年來此貴族院ニ於テ建議又ハ議案ニ對シテモ贊成シテ來タ一人デゴザイマスカラ無論贊成致スノデゴデイマス。

○委員長（子爵曾我祐準君）曾サンノ御意見モ出マシタガ、可決ト認メテ宜シウゴザイマナカ。

（「異議ナシ」ト呼ブ者アリ）

○委員長（子爵曾我祐準君）各條ニ移リマス、全部ヲ問題ニ供シマス。

○委員長（子爵曾我祐準君）可決ト認メマス、卽チ全部可決ト云フ報告ヲ致シマスカラサウ御承知ヲ願ヒマス。

かくして委員會は本案を可決の上、委員長は其の旨を議長に報告し次で議院は本案の第一讀會の續會を開いた。



刑務所だより

受刑者の錬成

前橋刑務所

今回當前橋刑務所に於いては時局下行刑の本旨に基き一部受刑者に對し錬成を施行せられ極めて良き成果を收めたり。此の試は第一回は本年一月二十七日より二月五日迄の十日間に亘り實施せられたるも、其の錬成員三十名の選定に當りては、

(1)年齡三十歲以下なること
(2)身體に缺陷無き者なること
(3)行刑成績優良なる者及劣惡なる者
(4)各工場より五名宛選定すること

而して之を工場管區別に從ひ二班に分ち、各班には班長を置き更に組長を指名して統率せしむ、又一方夜間は室長以下六名の班員を以て五室に分ち錬成舍に收容せり。而して組長、班長、室長は指導者の命令を班員に傳達し室、班、組は各々其責任を負ひ錬成員にして規律を紊り作業能率を低下する者ある時は直に除外する方針のもとに所長を指導者とし敎誨師及副看守長又は看守部長一名之が指導補助者となり各課長及看守長敎誨師も參加して實施せり。

其の日課を示せば左の如し

日課

一、起　床　午前四時五十分
一、神前禮拜、國民儀禮、受刑訓
唱和　午前五時十分
一、駈足及體操　午前五時三十分より一時間、佛前禮拜、朝食、勤勞奉仕午前六時三十分より一時間
一、一般作業就業午前七時三十分
一、敎練及勤勞奉仕午后二時三十分より三十分間
一、精神講話　午后七時三十分より一時間
一、自　習　午后八時三十分より一時間
一、就　寢　午后九時三十分

第一日此の日早朝四邊未だ覺めやらず赤城嵐の寒風は容赦なく肌を刺し身を切るが如し、受刑訓を終りたる全員は所長に從ひて運動場に出づ、各課長も自發的に參加し周圍百二十米の運動場を三回五回と駈ける。延長約五粁を駈け終るや建國體操及基本體操を終れば所定の六時三十分に近し、直に敎誨堂に入り佛前に禮拜、七佛遺戒偈を誦し特設の錬成員食堂に入る（期間中全員五等食とす）

所長も錬成員と食事を共にす。食後猶豫なく勤勞奉仕として構內の不用石を運搬し淸掃を行ふ。やがて就業の喇叭を合圖に平常の通り各工場に歸りて業に就く。

晝食後及午后の休憩時間は勤勞奉仕として或は便所掃除又は石運搬に奉仕し夜業終るや憩ふ暇なく中央二階の小講室に入り正座して威儀を正し敎誨師より日本精神に就き每夜連續講義あり終つて所長より訓話或は詩吟を敎授。

歸室後は日記帳に錬成の狀況及其の感想を認め午後九時三十分漸く就寢す。

第二日目及第十日目の二回に亘りポンプ使用の訓練を行ひ其使用法を習得せしめたり。

第七日目は特に空腹鍛錬として晝食を採らず晝間の時間を勤勞奉仕の時間として石運搬をせしめ午后二時三十分に至り代用食うどんを與へたるが尊き試練として不平を感ぜし者なし。

第九日目は夜中午前一時二十分錬成員に對し非常呼集を行ひ訓示を與へられる等不斷の緊張を以て一同眞劍に錬成せり。

一般受刑者中には錬成の眞意を解せず『小兒じみたことだ』等と冷笑の念を有し居たる者も日々の行事狀況を側聞するに及び其の非を悟りたる者多く中には今回選に漏れたるも次回の錬成には是非加入し度申出づる者或は工場內に於て自發的に錬成せんものと作業に精勵し言動を謹み他衆より稱讚せらるゝ者等ありて一般受刑者に對する好影響亦少なしとせず。

刑政第56巻第4号
矯正図書館

莊子物語

齊物論（三）

聰八郎

夫隨二其成心一而師レ之、誰獨且無レ師乎。奚必知二代而心自取一者有レ之。愚者與有焉。未レ成二乎心一而有二是非一、是今日適レ越而昔日至也。是以無レ有爲レ有。無レ有爲レ有、雖レ有二神禹一且不レ能レ知。吾獨且奈何哉

夫言非吹也
言者有レ言。其所レ言者、特未定也、果有レ言邪、其未二嘗有一レ言邪。其以爲異二於鷇音一。亦有レ辯乎。其無レ辯乎。

道惡乎隱而有二眞僞一。言惡乎隱而有是非。道惡乎往而不レ存。言惡乎存而不レ可。道隱二於小成一、言隱二於榮華一。故有二儒墨之是非一、以是二其所レ非、而非二其所一レ是。欲レ是二其所レ非、而非二其所一レ是、則莫レ若レ以レ明。

物無レ非レ彼、物無レ非レ是。自レ彼則不レ見、自レ知則知レ之。故曰彼出於是、是亦因レ彼。彼是方生之說也。雖レ然方生方死、方死方生。方可方不可、方不可方可。因レ是因レ非、因レ非因レ是。是以聖人不レ由、而照二之於天一、亦因レ是也。

是亦彼也、彼亦是也。彼亦一是非、此亦一是非。果且有レ彼是乎。果且無レ彼是乎。

彼是、莫レ得二其偶一、謂二之道樞一。樞始得二其環中一、以應二無窮一。是亦一無窮、非亦一無窮也。故曰莫レ若レ以レ明。

眼を開いて仰いで見よ！
そこには月影がある。
一たび惱みの暗に沈むなれば、
永劫にも光りの世界に浮び出づることはかたい。
はてしなき野邊、露に霑ふ草の葉の、
その一つ一つの末葉まで、月の光はやどるものを。
秋の夜半、雲一つなき蒼空、圓かに輝くあの月のやうに、
隈なく照す神明、
その缺目のない、大いなる心に隨つて、
それを師とするならば、
誰か獨りとして、導かるゝものゝ無いといふことがあらうか。
彼の眼前に交代し、亂轉して暫くも息むことなく、
各〻自らそのものゝ流轉をうけてゐることを覺れる程の人のみでなく、
いかに愚かなるものもまた、
大いなるこの成心に興かり、それに照され、それ導かるゝのである。
未だその明鏡に照さるゝことなく、徒らに我が知を以て、是非善惡を爭ふは、
あだかも今日、遠ほき越の國へ旅だち適いたのに、
昔日、既に越の國へゆきついたといふやうなものである。
是れ有ること無きをもつて、有りとするものである。
有ること無きをもつて、有りとすれば、
神の如き聖人大禹を、ふたゝび此の世に呼びもどすとも、
且た知ることは出來まい。
吾れ獨り、知るの、知らぬの、是の非のと云つても、畢竟いかんすることもなるまい。

それ人の言語は、たゞ徒らに吹くのではない。
言語には、必ずやものいふべき意ありてこれを言いふのである。
從つて是非こゝに生じ、異同こゝにあらはる。
去りながら、その言は、そなたから湧き出たのか、
又はかく言はしむるものがあつて、言ふのであるか。
未だ特に定まれる畢竟の依りどころなければ果して是非を爭ふべき言といふものがあるのか。
それいまだ嘗つて異同を論ずべき言がないのか。
大觀し來れば、かの風の吹くによつて大少雜多の聲を放つやうなもの、
明道に依らなければ、何の標準があらう。
いやしくも若しそれ言ふことなくして、
口にあらはし、たゞ音にひゞかすとならば、今卵の殼を破つて出たばかりの雛鳥のコヽコヽと鳴く音と何の異があらうぞ。
されば大いなる天地の心を心とせずに、
葦の穴ほどの小さい己が知をふりかざして互に異といひ、同といひ、
是といひ、非といふも
畢竟じて何の詮するところぞ。
道にはもと自ら眞僞はないわけであるのに、
この道いづくにか隱れて、世に眞僞といふことが出て來たのであらうか。
天地神明にかなひたる至言は、もと自ら是非が無いわけであるのに、
至言いづくにかかくれて、世に是非の論が出て來たのであらうか。
凡そ天地宇宙一切世界海、

言惡乎隱而有是非。道惡乎往而不存。言惡乎存而不可。道隱二於小成一、言隱二於榮華一。故有二儒墨之是非一、以是二其所レ非、而非二其所一レ是。欲レ是二其所レ非、而非二其所一レ是、則莫レ若レ以レ明。

物無レ非レ彼、物無レ非レ是。自レ彼則不レ見、自レ知則知レ之。故曰彼出於是、是亦因レ彼。彼是方生之說也。雖レ然方生方死、方死方生。方可方不可、方不可方可。因レ是因レ非、因レ非因レ是。是以聖人不レ由、而照二之於天一、亦因レ是也。

是亦彼也、彼亦是也。彼亦一是非、此亦一是非。果且有レ彼是乎。果且無レ彼是乎。

彼是、莫レ得二其偶一、謂二之道樞一。樞始得二其環中一、以應二無窮一。是亦一無窮、非亦一無窮也。故曰莫レ若レ以レ明。

凡そ物として彼に非ることなく、
物として是に非ることなし。
各〻彼我あり、
いづくに往くとして道の存せざるところはない。
いやしくも大自然の胸の中から湧きいづる至言ならば、
いづくに存在しても、みな是れ可ならざるはなく、何ぞ是非の紛亂がある。
見よや、眼を開けよや。明々の鏡に照せよや。
道は、己がこざかしき小成の知によつて隱れ、
至言は、ものいふことの葉の榮華にかくれて、まことの聲は聞えぬ。
故に、やれ仁義だ、やれ孝悌だと、徒ら道をはなれて言葉にとらはるゝ孔子の徒となり、
或は汎く衆てを愛せねばならぬと兼愛を說く墨翟の奴となり、
相互に是非を爭ひ、
彼の是とするところは、此は非とし、
此れの是とするところを、彼は非として、紛亂止むことがない。
若し夫れ苟くも是非同異を定めんとするならば、
小知、小見をすてゝ、すべからく神明をもつてせねばならぬ。

凡そ物として彼に非ることなく、
物として是に非ることなし。
各〻彼我あり、
彼此是非の外に立てば、明鏡我れにあつて、一切を照さすであらう。
故に曰ふ
彼は是によりて出で、
是も彼によつて出づる。
彼だ是だといつて相爭ふの學說の如きは、
全くこれ共にこれ相對世界の、言葉と概念の爭ひにすぎぬ。
さはさりながら、
相待世界は、まさに生ずればまさに死す。
まさに死すればまさに生ず。
まさに可なればまさに不可あり、
まさに不可なればまさに可。
是によるが故に非は出で來り
非によるが故に是はよつて生ず
相待世界は循還、連々窮まることがない。
故に聖人はそれが如き波の如く涯てしなき浮動に由ほず、
我が心を心とせず、昭々たる天の心を心とするのである、
亦これ是するところありと曰はねばなるまい。
我が心をはなれて觀れば、
是も亦彼である。
彼も亦是である。

一切の個立の體は我が心によることなければ、それをはなれてみれば、
何一つみても無窮ならざるはない。
米の一粒といへども、過去久遠來一切世界の無盡の力を負うて、現に我前に在り、而して我が血となり、肉となる。
されば彼も亦一是非であり、
此も亦一是非であり、
果してまたその彼といひ、是といふものがあるか。
果してまたその彼といひ、是といふものが無いか。
彼といひ是といふも固より相待のものではない。
さればこそ或は是となり、或は彼となるのである。
彼是共によつて出づるもの、これをこそ道樞といふのである。
鳴〻道樞こそ一切に制せられずして、一切を轉ずるものである。
こゝに至つて一切世界海に自在に無窮に應ずるのである。
故に是も亦一無窮
非も亦一無窮、
明々朗々、天心のうちに、何の儒墨かある。何の曼子かある。

（つづく）

刑政第56巻第4号
矯正図書館



臼田亞浪選

月凍る夜を双こぼれの劍を研く　岡山　岡本空拳子
寒月や閣の底なる獄舍の灯　高松　三原いしろ
霜きびしアリユーシヤンの兵を瞼にす　奈良　莞　人
着ぶくれて襤の小孩あどけなく　青森　稻田　浩
下崩や病囚の試歩覺束な　府中　井上しのぶ
召されたる鐘の供養や鶯子啼く　廣島小　林
ふと聞くは鶯なりし谿深く　名古屋設樂銀月
征く子の汽車の遠くなりホーム寒むかりし　府中　川鍋茂穗
鰤船に賑はふ濱の春淺し　三重勝島精一
西日強う雪解の藥塚のかげろへり　富山　栃折越人
絨衣乾す兵逞しき春の風　西巢鴨　小林翠月
托鉢僧雪解雫を拂ひ佇つ　富山あきを
寒明けや樹氷ちらして雀鳴く　二見ヶ岡　竹　亭
病監の靜かなりけり夜の春雨　鳥取　坂田光壽
春耕す山のてつぺんに牛のそと　新義州　濱田青村
雪どけの道に軍馬のいなゝけり　新義州　玉利白泉
晴れにける病窓寒の雀來て　青森　增茂紀葉
春淺き川面かすめて鳥翔けり　京都　藤田玉胤
汽車煙とけ行く春の山覺めて　廣島　深見右左吉

臼井大翼選

鶏をよぶ聲のびやかに聞こへ來て日暮れは多の寂けさにあり　八日市場　小川太市
二毛作の多田の面に生へし麥この頃やゝに青みそめつつ　八日市場　小川太市
梅の木に花は咲きみち曉の今朝の靜けさ鶯の啼く　宮城　志賀宮童
みいくさを勝拔かせんと朝々に心をしめて職場にぞゆく　横濱　森　愛子
町並に暮色こもりて河舟の煙靜かに泊りすらしも　横濱　森　愛子
懸樋より淸水流るる神池に映れる木々の影の深しも　八日市場　小川太市
落水のしぶきに濡れて崖下に芽崩えそめたる猫柳の木　臺南　長澤星城
牡丹雪に陽さしうつれる晝下り勝ち拔く年の秋ゝゆたかに　府中　齋地仙北
柳山に夕日は落ちて勇士等の鐵のかぶとがにぶく光れり　新義州　玉利白泉
大君の醜の御楯と征く友のそのきはの精神(こころ)淚しむ吾は　八日市場　小川太市
今日の雨に鶯來啼き我庭の間垣のみどり色增しにけり　宮城　志賀宮童

出雲富士括り桑の上に　松江　川津天水
雉子高鳴く眼下に相模灘展け　小田原　大木舟波
餅花のどんどの臭みめでにけり　松本市　川紅東
藪入の巷灯の來て雪舞へる　松本市　川紅東
柚山の焚火のけぶり雪に匍ふ　函館　船山船風
鐘あらぬ鐘樓北風の吹きぬけり　松本市　川紅東
みいくさの捷ち續ぎ子等は雛祭る　札幌　遠藤光雄
雪原を來し眼に蜜柑いろ深し　宇都宮　鈴木マサ
二度三度春雷をきき湖を漕ぐ　松江　川津草筏
凍雲衝き廬山眼下に快翔す　長控　龍田杏村
おほわだへちぎれちぎれて多の雲　高知　中田黑光佛
囘覽板渡し加はる爐話に　鹿兒島　小原杜運
驅逐隊の船跡の如き雲四列東の空ゆ北に流るる　全州　三好敏郎
早春の光反射する事務窓を大きく開けて陽を入れにけり　札幌　遠藤光雄
この夜頃小部屋にくらく灯ともして病める人はも寢ねこもるらし　廣島　生野連々
江に聳てる樓上きびしき氷雨にし哨空兵は身じろぎもせず　長控　龍田杏村
旋盤の音せはしげ入り亂れ若き囚等のひたむきにあはれ　小田原　本田花香
信濃路は彌生なかばに積む雪の厚き上枝に蕾のぞくも　長野　中澤旭山
一夜さの雨のしめりに春立ちてむらさきだてり木の芽ふく山　宮崎　志賀宮童
たまたまに鄕に歸りて懷しき母校の庭を一人步めり　廣島　深見左右吉

第三十五回刑務官練習所入所試驗問題

昭和十八年一月十五日施行

其の一

刑法

一　假出獄を說明せよ

刑事訴訟法

一　被告人の地位に付き論述せよ

行刑法

一　戒護を說明せよ

常識

二　左の語を簡單に說明せよ
(イ)獨居拘禁　(ロ)減食　(ハ)構外作業　(ニ)情願　(ホ)免業

其の二

文

一　幼かりし頃

作文

(一)松下村塾　(二)國防國家　(三)鐵牛　(四)俘虜　(五)東京都

算術

(一)或ル仕事ヲヤスニ甲ハ四日ヲ要シ乙ハ三日ヲ要スル。モシ甲乙兩人共力シテナセバ幾日ニテ完成スルカ

(二)普通列車ノ速度ハ毎秒一二米、急行列車ノ速度ハ毎秒一五米ナリ。長サ一二三米ノ普通列車ト九六米ノ急行列車トガ反對ノ方向ヨリ進行シ來リ擦レ違ヒ離レルマデニハ何秒ヲ要スルカ。

(三)時速二二五粁ノ爆撃機ガアル目的地ニ向ツテ飛行場ヲ離陸シタル二時間半ノ後、之ヲ追ツテ時速三五〇粁ノ戰鬪機ガ同飛行場ヲ離陸シタリ。コノ戰鬪機ガ爆撃機ニ追付クマデニ何時間ヲ要スルカ、又ソノ點ハ飛行場ヨリ何粁ノ距離ナルカ。

刑政第56巻第4号
矯正図書館



書道高橋雨鶏

第三十回競書成績

◎印は當選、○印は昇級、課題隨意、何れか昇級すれば次回より兩方とも昇級します。

五級

島刑　信清　静刑　◎玉利
札幌　河村進　廣島　清水廣一
名刑　渡邊晃　三刑　村上二鴻
横刑　大木榮一

四級

◎華堂　永刑　◎前島
飛龍　司法省　高橋樹畑
松上豐子　島刑　信清
池龜曉雲　朝鮮　越智翠風
（以下略）

三級

馬山　◎村上二鴻　松江　金織玉仙
府刑　竹雲　名刑　長谷川靜子
大塚文子　渡部純克
（以下略）

課題

特級

府中　◎齊地仙北　松江　澁谷曉山
東京　名刑　竹内雲洋　廣刑　翠巒甲
名刑　宮下芳山　長崎　松尾映山
水刑　松浦竹巖　名刑　中川好明
長崎　龍田杏邨　四級　◎高橋樹畑
名刑　通木黨洲　司法省　吉野繁

二級

松江　◎小川舟水　静刑　秋月
帶廣　柳堤石　司法省　成田定雄
豐刑　高橋雨　朝鮮　越智翠風
府中　池田竹雲　水刑　井上亥白
臺北　宇田龍雲　臺北　細貝正
臺北　細貝正　派である。侵すべからざ り。▲萬柳君、品がよい。
府刑　芳洲　るものをおこしてゐる。▲課題
（以下略）　前島君、體勢よく整ひた　篤行足ニ以テ厲シ俗ニ

隨意

特級

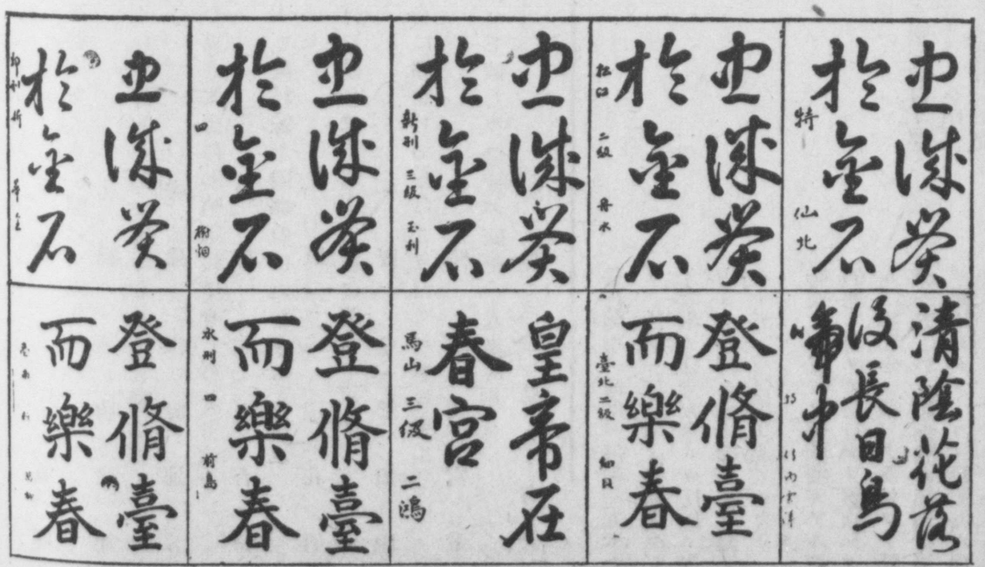
名刑　◎竹内雲洋
府中　齊地仙北
吉田光月
澁谷曉山
小林祐水
（以下略）

二級

◎細貝正　柳堤石

▲仙北君、氣宇が大きい
▲舟水君、沈着であるが少し重い。▲玉利君、筆が良く暢びてゐる。▲樹畑君、雅致がある。▲華堂君、達筆である。▲雲洋君、五言二句よく收めたり溫雅な味賞すべし。
▲細貝君、綺麗である筆刀がほしい。▲二鴻君、立

審査概評





泰國の司法制度

泰國の司法制度の成立は遠く明治二十五年に遡るが、治外法權撤廢の曲折を經て眞の司法自治が確立されたのは近年のことである。卽ち昭和九年に民商兩法の改正法、民訴手續法、新裁判所構成法が公布され、昭和十年十月一日新裁判所構成法に基いて三審制が軌道に乘り法治國の實體を具へるに至つた。

一審裁判所としては盤谷及びドンブリにクウエン裁判所（區裁判所）、民事及び刑事裁判所があり、又其他地方にクウエン裁判所、チヤンヴアツド裁判所（民事刑事々件全部を裁判する地方裁判所）がある。上級審は控訴院及びデイカ裁判所（大審院）である。

判事は辯護士から選任されてゐたのを改め、現在では判事登用試驗を通過したものが任命される。登用試驗の受驗資格は、盤谷法政大學（四年制）を卒業し學位プリンヤトリを持つものとなつてゐる。又大學の卒業生は辯護士會に入會することによつて辯護士として開業することが出來る。

ともあれ法規の整備、司法官の充實、裁判所の適正配置等が着々と進んで居るのは同盟國のために誠に喜ばしいことである。

米英の死活を劃す
樞軸の潛水艦活動

米英にとつて現在最大の脅威は、樞軸潛水艦の通商破壞戰である。米の發表した最近一ケ月平均喪失船舶百萬噸前後と云ふ數字は國民を今更の如く不安と焦燥に突き落し米紙の如き「潛水艦對策を怠つたら反樞軸國はきつと負ける」とまで云はずには居られなくなつた。英當局も「一九四三年における聯合國側最大の弱點はドイツ潛水艦に依る船舶の喪失である」とし英軍作戰の誤謬を認めてゐる。だが、さて對策如何となると全く手の下し樣がなく、匙を投げてゐる有樣だ。窮餘の策としていろ〳〵の迷案が並べたてられてゐるが、その幾つかを拾へば

一、商船の檣や煙突其他不要な上甲板構造を取り除き速度を出來るだけ早くすること

一、航續距離の長い飛行船を使用すること

一、何らかの方法で潛水艦の攻擊水域を强く照明し、爆擊、爆雷の效力を發揮させること

一、護送船團の速度を從來の六、七節より十節以上に速めること

一、ドイツ造船所及び潛水艦基地に對する英の空爆强化

などとりゞ〳〵であるが、結局米英兩國の潛水艦對策としては何の具體的措置もない狀態だ。ドイツは開戰當時既に二百隻の大潛水艦隊を保有し、現在一週八隻乃至十隻の割で建造されてゐると云はれる。豫備品部分品の不足もなく、乘組員の養成にも困つてゐないとは英海軍通ウ大佐も指摘して居る。加ふるにドイツ海軍の最新式潛水艦は凡ゆる種類の輸送船に追ひ付く速さをもち、裝甲厚く擊沈の可能性が薄いし、潛水速度、航續距離、精巧な方向探知等に於てすばらしい性能をもつてゐる。獨軍當局は本年作戰の重點を潛水艦活動においてゐるから、米英の苦腦は益々加はるばかりである。

米の對日空襲企圖

日本人は空襲をうける覺悟だけはした方がよい（海相ノツクス）といきまいたり、日本と云ふ巨大な蛸をやつつけるには頭をつく外ない、その頭とは東京だとか、目下米國內の關心は日本空襲に集中してゐる。帝都初空襲以來早くも一年、我が備へにいさゝかの怠りもないが、敵もまた必死だ。

「日本を破るには北方からアツツ島キスカ島を奪回し、之を基地にして本土を爆擊するのが先決だ」とする意見もあり、北方からの襲來には充分に警戒せねばならない。次に航空母艦からの片路飛行が考へられるが、母艦は太平洋で全滅し、先づその補充が第一だ。米の誇る戰艦第一主義がもろくも潰えた今日、作戰方針を空母中心主義へ轉換し、航空母艦の新造又は改裝に狂奔してゐるから、第一次空襲再演の可能性もなしとしない。又間題の成層圈飛行機もまだ實用の域に達せず、結局支那大陸を基地とする日本空襲あたりに落付くこととなり、大言壯語にも似ず、まことに氣の永い——と云ふより見込のない——話となる。流石のルーズヴエルトも、上調子の日本空襲論を抑へ、「それは太平洋を島から島へ攻め上り、同時に支那から日本軍を驅逐しでからのことだ」と陸上基地確保の要を說いてゐる。何れにせよ敵機は常に日本の心臟を狙つてゐる。臆病犬の遠吠えにしろ不斷の用意が肝要だ。

刑政第56巻第4号
矯正図書館

刑務官異動

二月一日
豐多摩 保健技師 青山 仁（府中）

二月三日
横濱覺秋田 看守長 成田重次（秋田）
秋田 同 四方新太郎（札幌）
横濱覺大通支 同 二色米藏（大通支）
免本職横濱覺高崎支 同 木部元雄（高崎支）
高崎支所長覺前橋 同 猿渡重雄（前橋）

二月四日
神戸 保健技師 西 周（水戸）
水戸 同 高松 勵（府中）

二月十日
川越 典獄補 小野崎權七（久留米所長）
久留米所長文官委員長 同 松山憲太郎（名古屋）
免覺小田原少年 同 大井 久（小菅覺川越）
小田原少年覺横濱 看守長 竹内重雄（川越少年覺横濱）
小田原少年覺川越 同 大江武次郎（川越少年）

二月十三日
願免 看守長 岩崎利男（岡山）
覺小田原少年 考査官 玉生道經（川越少年）

二月十五日
奈良 看守長 中村外喜男（横濱覺新潟）
任保健技師六級府中 尾持昌次

二月十六日
甲府 保健技師 山中藤次郎（免）

任典獄補廣島 七等六級 作業技師 朝岡晴光（廣島）

二月十八日
願免 典獄 江村繁太郎（岡山）

二月十九日
豐多摩 典獄 武藤 亘（山口）
岡山所長文官当通委員長 同 鈴木英三郎（小田原少年）
山口所長文官当通委員長 同 中尾文策（横濱）
覺補小田原所長文官当通委員長 同 小野崎權七（川越）
任豐多摩技師十級 看守長 中濱友三郎（豐多摩）
任陸軍司政官 典獄補 小野崎權七（川越）
小田原少年覺横濱 同 横山和義（廣島）

二月二十三日
覺任司法關（行刑局） 看守長 須田壽雄（小菅）
任典獄補名古屋 七等七級 作業技師 小菅 同 吉瀬陽（東京拘）
任典獄補府中 七等七級 看守長九級俸 同 奥田 將（府中）
任作業技師十級府中 看守長 小穴鐘藏（行刑局）
任作業技師十二級豐多摩 同 中濱友三郎（豐多摩）
任作業技師十二級府中 同 廣瀨英五郎（府中）

三月一日
東京拘 看守長 關 勇（大阪拘）
大阪拘 同 手島敏美（福岡）
福岡 同 杉本梅吉（熊本）

三月八日
高知 看守長 北村騎一郎（丸亀支覺高松）
高松覺滋賀 同 纐纈末雄（滋賀）
滋賀 同 倉淵安一（高松）
高松覺德島 同 高貫鴻（德島）
高松覺大阪 同 上野豐（大阪）
大阪 同 山内永七（新潟）

新潟覺新潟 同 柏榮壽（新潟）
丸亀支覺高松 同 浦上支 高橋繁太（小倉支）
同 宮田 誠（靜岡） 同 石川榮市（富山）
同 山口重幸（横濱） 同 山口 同 重富一郎（浦本支覺神戸）
山口覺松本少 同 玉井策郎（松本少） 同 金杉 濟（府中）
名古屋拘 同 藤田 勳（靜岡） 浦本支覺神戸 同 鈴木與三（宇都宮）
同 井上與三市（名古屋拘） 同 府中 同 柳澤利喜平（山口）
鹿兒島覺浦上支 同 毎熊一郎（浦上支） 同 宇都宮 同 藤田新一（高知）
同 神戸

刑務協會主事 阿部清衛氏を悼む

刑務協會の編輯部員として長年雜誌「人」の編輯を擔當して來られた阿部清衛氏は去る三月十一日忽焉として長逝せられた。享年五十三歲。その寡默應揚の性格は時として偏屈にさへ見らるゝこともあつたが內に藏する處の深く且極めて潤のあるひとであつた。氏が鳩雨と號し短歌をよくせられ、その主宰せられた同人雜誌「草炎」は昨年六月既に十周年を迎えた。

氏が協會に奉職せられたのは昭和三年のことで、爾來十數年、氏は只一筋に雜誌「人」の編輯に沒頭して來られた。敎化の重要部面を擔當する「人」雜誌の編輯は多事多端であつたが、氏は終始默々として、受刑者の心の糧としての「人」を今日に育てゝ來られたのであつて、行刑敎化の影の人として殘された氏の功績は極めて大きい。今更に氏の生前の勞に對し滿腔の謝意を表する次第である。

氏のものされた絕詠をかかげ、その人柄を偲び哀悼に代へたい。

絕詠

癸未新年　　阿部鳩雨

門松をさへ立てぬ家多し決戰の國のすがたの嚴しく祝ふ
戰にきびしき國の明けゆくや飛行機すでに天とどろかす
はつ空にすでに飛行機とどろけり勝をつらぬく年の聲かも
勝ちぬかむこの年祝ぎに貧ひ足らふ餅はありて心ゆたけし
故鄕よりの上つ毛の餅友よりのみちのくの餅ありて年祝ぐ
いよいよにきびしき年を祝ひつつ力みち滿つる國しづかなり
三ケ日祝ぎてしづかに休養へりいや勝ちぬかむ力充ち來も
戰は勝たざるべからず吾が友の多くは生きてなはし戰ふ

投稿規定

（締切毎月二十日嚴守）

課題　本號揭載の手本揮毫のこと　一人一枚
隨意　臨書、自運何れにてもよし　一人一枚
條幅　小甕仙半折大書體隨意　一人一枚
送先　東京市品川區品場川三ノ八三一番地　高橋白鷗先生宛
注意　級位あるものは級位、所屬、氏名、雅號等を明記すること。新に應募するものは級位は新とす。

俳壇　歌壇

課題　隨意

用紙　官私製葉書　俳句は一葉に五句迄　短歌は三首迄とすること。

送先　東京市麴町區霞ヶ關一丁目一番地　刑務協會「讀者の聲」係宛

讀者の聲

用紙　四百字詰原稿用紙

字數　一千字以內

送先　東京市麴町區霞ヶ關一丁目一番地　刑務協會「讀者の聲」係宛

編輯後記

□滅頁第二號をお送りする。前々から心構へていろいろ編輯面の刷新を企てゝはゐたのであるが、前號では未だしの觀があつた。本號にいたつて漸く一應の四十頁體制を整備したつもりである。讀者各位の御注意を歡迎したい。

□ところで本誌の印刷部も、御多分に漏れず、人手不足のためとかく遲れがちである。前號などはひどかつた。時節柄と御容赦を願ひたいが、本號はその取りかへしをしたつもりである。

□前號豫告の通り、尾崎士郎氏の從軍記を載せた。今日最も得難い氏の玉稿を、御病中にも拘らず、特に小誌に寄せられた御好意を多謝すると共に、併せて、署名の向井潤吉畫伯が別に鮮麗たるいい繪を下さつたことは感激の他はない。そしてこれは

□深田久彌氏からも、ついに待望の隨筆をいただくことが出來た。

□初山滋氏の表紙繪の、獨立のうつくしさを味つてくれる士が多くなつて來た。この頁け早晩擴げたければならまい。

——（てらみつ）——

一冊（稅共）金三十錢
六冊（稅共）金一圓八十錢
十二冊（稅共）金三圓六十錢

●御注文は總て前金のこと
●御送金は郵便爲替ならば司法省郵便局取扱にて振込のこと、但しなるべく振替を利用せられたし、口座は東京六五〇九九番刑務協會とすること
●御注文の際は必ず送付先明記のこと、從つて轉居の際は新舊住所を御屆け下されたし

明治二十七年二月二十六日第三種郵便物認可
昭和十一年三月二十八日　印刷　納本
昭和十八年四月一日　發行
東京市麴町區霞ヶ關一丁目一番地二
編輯兼發行人　大原虎夫
東京市淀橋區諏訪町二丁目九番地
印刷人　日本出版配給株式會社
配給元　刑務協會印刷所
東京市麴町區霞ヶ關一丁目一番地二
印刷所　刑務協會
發行所　電話銀座二三四四・三八二五
振替口座　東京二五〇五九番

刑政第56巻第4号
矯正図書館

莊子物語

齊物論（三）

聰八郎

夫隨二其成心一而師レ之、誰獨且無レ師乎。
奚必知二代而心自取一者有レ之。
愚者與有焉。
未レ成二乎心一而有二是非一、
是今日適レ越、而昔日至也。
是以レ無レ有レ爲レ有。
無レ有爲レ有、雖レ有二神禹一且不レ能レ知。
吾獨且奈何哉

夫言非レ吹也
言者有レ言。
其所レ言者、特未定也、果有レ言邪、其未二嘗有一レ言邪。
其以爲レ異二於鷇音一。亦有レ辯乎。其無レ辯乎。
道惡乎隱而有二眞僞一。

眼を開いて仰いで見よ！
そこには月影がある。
一たび惱みの暗に沈むなれば、
永劫にも光りの世界に浮び出づることはかたい。
はてしなき野邊、露に霑ふ草の葉の、
その一つ一つの末葉まで、月の光はやどるものを。
秋の夜半、雲一つなき蒼空、圓かに輝くあの月のやうに、
隈なく照す神明、
その缺目のない、大いなる心に隨つて、
それを師とするならば、
誰か獨りとして、導かるゝものゝ無いといふことがあらうか。
彼の眼前に交代し、亂轉して暫くも息むことなく、
各〻自らそのものゝ流轉をうけてゐることを覺れる程の人のみでなく、
いかに愚かなるものもまた、
大いなるこの成心に興かり、それに照され、それ導かるゝのである。
未だその明鏡に照さるゝことなく、徒らに我が知を以て、是非善惡を爭ふは、
あだかも今日、遠ほき越の國へ旅だち適いたのに、
昔日、既に越の國へゆきついたといふやうなものである。
是れ有ること無きをもつて、有りとするものである。
有ること無きをもつて、有りとすれば、
神の如き聖人大禹を、ふたゝび此の世に呼びもどすとも、
且た知ることは出來まい。
吾れ獨り、知るの、知らぬの、是の非のと云つても、畢竟いかんすることもなるまい。

それ人の言語は、たゞ徒らに吹くのではない。
言語には、必ずやものいふべき意ありてこれを言いふのである。
從つて是非こゝに生じ、異同こゝにあらはる。
去りながら、その言は、そなたから湧き出たのか、
又はかく言はしむるものがあつて、言ふのであるか。
未だ特に定まれる畢竟の依りどころなければ果して是非を爭ふべき言といふものがあるのか。
それいまだ嘗つて異同を論ずべき言がないのか。
大觀し來れば、かの風の吹くによつて大少雜多の聲を放つやうなもの、
明道に依らなければ、何の標準があらう。
いやしくも若しそれ言ふことなくして、
口にあらはし、たゞ音にひゞかすとならば、今卵の殼を破つて出たばかりの雛鳥のコ、コ、コ、と鳴く音と何の異があらうぞ。
されば大いなる天地の心を心とせずに、
葦の穴ほどの小さい己が知をふりかざして互に異といひ、同といひ、
是といひ、非といふも
畢竟じて何の詮するところぞ。
道にはもと自ら眞僞はないわけであるのに、
この道いづくにか隱れて、世に眞僞といふことが出て來たのであらうか。
天地神明にかなひたる至言は、もと自ら是非が無いわけであるのに、
至言いづくにかかくれて、世に是非の論が出て來たのであらうか。
凡そ天地宇宙一切世界海、

言惡乎隱而有二是非一。
道惡乎往而不レ存。
言惡乎存而不レ可。
道隱二於小成一、言隱二於榮華一。
故有二儒墨之是非一、以二是レ其所レ非、而非二其所一レ是。
欲下是二其所レ非、而非中其所上レ是、
則莫レ若レ以二明レ此。

物無レ非レ彼、物無レ非レ是。
自レ彼則不レ見、自レ知則知レ之。
故曰彼出於レ是、是亦因レ彼。
彼是方生之說也。
雖レ然方生方死、方死方生。
方可方不可、方不可方可。
因レ是因レ非、因レ非因レ是。
是以聖人不レ由、而照二之於天一。亦因レ是也。
是亦彼也、彼亦是也。彼亦一是非、此亦一是非。果且有二彼是一乎哉。
彼是莫レ得二其偶一。謂二之道樞一。
樞始得二其環中一、以應二無窮一。
是亦一無窮、非亦一無窮。
故曰莫レ若レ以レ明。

いづくに住くとして道の存せざるところはない。
いやしくも大自然の胸の中から湧きいづる至言ならば、
いづくに存在しても、みな是れ可ならざるはなく、何ぞ是非の紛亂がある。
見よや、眼を開けよや。明々の鏡に照せよや。
道は、己がこざかしき小成の知によつて隱れ、
至言は、ものいふことの葉の榮華にかくれて、まことの聲は聞えぬ。
故に、やれ仁義だ、やれ孝悌だと、徒ら道をはなれて言葉にとらはるゝ孔子の徒となり、
或は汎く衆てを愛せねばならぬと兼愛を說く墨翟の奴となり、
相互に是非を爭ひ、
彼の是とするところは、此は非とし、
此れの是とするところを、彼は非として、紛亂止むことがない。
若し夫れ苟くも是非同異を定めんとするならば、
小知、小見をすてゝ、すべからく神明をもつてせねばならぬ。

凡そ物として彼に非ることなく、
物として是に非ることなし。
各〻彼我あり、
各〻是非あり、
彼此是非の外に立てば、明鏡我れにあつて、一切を照さすであらう。
故に曰ふ
彼は是によりて出で、
是も彼によつて出づる。
彼だ是だといつて相爭ふの學說の如きは、
全くこれ共にこれ相對世界の、言葉と概念の爭ひにすぎぬ。
さはさりながら、
相待世界は、まさに生ずればまさに死す。
まさに死すればまさに生ず。
まさに可なればまさに不可あり、
まさに不可なればまさに可。
是によるが故に非は出で來り
非によるが故に是はよつて生ず
相待世界は循環、連々窮まることがない。
故に聖人はそれが如き波の如く涯てしなき浮動に由はず、
我が心を心とせず、昭々たる天の心を心とするのである、
亦これ是するところありと曰はねばなるまい。
我が心をはなれて觀れば、
是も亦彼である。
彼も亦是である。

一切の個立の體は我が心によることなければ、それをはなれてみれば、
何一つみても無窮ならざるはない。
米の一粒といへども、過去久遠來一切世界の無盡の力を負うて、現に我前に在り、而して我が血となり、肉となる。
されば彼も亦一是非であり、
此も亦一是非であり、
果してまたその彼といひ、是といふものがあるか。
果してまたその彼といひ、是といふものが無いか。
彼といひ是といふも固より相待のものではない。
さればこそ或は是となり、或は彼となるのである。
彼是共によつて出づるもの、これをこそ道樞といふのである。
鳴〻道樞こそ一切に制せられずして、一切を轉ずるものである。
こゝに至つて一切世界海に自在に無窮に應ずるのである。
故に是も亦一無窮
非も亦一無窮、
明々朗々、天心のうちに、何の儒教かある。何の墨子かある。

（つづく）